



九、文辭を作らざる爲め、死後にその生命を傳ゆる事が出来ず、空しく朽ち果てねばならぬ。

十、講釋に依つて門戸を開いた者は講釋攻めの爲めや、門戸争の爲に門弟の個性を無視してその結果幾多の英才をも空しく埋らせてしまふ様な事になる。

斯くの如き十箇條を擧げてこの當時に於ける講釋萬能の教育法の缺陷を指摘し、この弊害を打破して自學主義の教育法を唱導したのであつて、徂徠がその子弟に講義するに當つても努めて上述の如き弊害を招來しない様に努力し、一字一句の説明や、各種の註、故事、逸話等に對して詳細に説明することを避けて居た。

徂徠は又漢文直讀直解法を主張し、從來の漢學研究法に一新生面を開いたのであつた。徂徠に依ると漢文は支那音を以て直讀し、その意味を解するべきであるとし、從來の倒讀、訓讀を廢して支那音に依り直讀せしめてその解をなすところの方法を案出したのであつた。徂徠が斯くの如く漢文直讀直解法を主張するに至つたのは、彼の體驗に基くところが多く、徂徠は前にも述べた如く極めて初學の間文を師に就て教育を受けなのみであつて、他は盡く彼自身の努力に依つて當代一流の歷儒と成つたので、其の經驗からして盛んに自學自習の教育法を奨励したのであつた。自學自習をするには先づ漢文を自由に讀破してこれを解し得る才の力がなくてはならないが、漢文を自由に讀解するには倒讀法に據つて居ては期し難い事で直讀直解法に依り漢文に對する實力が或程度まで出来ればその以後は少々難解な書物も平易に讀破することが出来ると云ふのであつて、現今の學校教育に於て外國語を外國の發音に依り讀み、これを日本語に依つて解するのと同じ方法であつて、倒讀法のあまねく行はれた當時徂徠が斯くの如き新しき教育法を提唱したことは大いに卓見と云ふべく、彼が前述の如き十項に涉る項目を擧げて當時講釋萬能の教育法を排撃したのと共に稱して餘りあるところである。



徂徠は單なる儒者に非ずして政治的手腕をも多分に持つた人であつて、歴代の將軍に仕へてよく政治運用上に對して献言し、大いに見るべきものがあつたが、教育行政上の事に關しても幾多見るべき説を爲してゐる。政談四卷は徂徠が幕府に上つた政治上の意見書であると云はれて居るが、その中に表はれて居る教育行政に關する彼の抱負を窺ふと大要次の如き項に別つてこれを擧げることが出来る。

- 一、江戸市中に數十の稽古所を設け、市民の教育機關として士庶の別なる教育を掌り、以て市民の教育程度を向上せしめること。
- 二、幕府に依つて出版される書籍の收入を傾けてこれを教育費に充當すること。
- 三、人材を登用することに依つて一段の奨學を計ること。
- 四、地方に於ける教育の普及發達を計る意味に於て、藩侯中十萬石以上の者に對して命令的に藩學を起させること。
- 五、學問を朱子學に限定する如き傾向を捨て、廣く行はしめる事にし、儒者の講釋風を専ら實用本位のものたらしむること。
- 六、武と文とは並び修むるものなるに就き、各學校に必ず武藝の稽古所を併設すること。
- 七、教育を普及し、其の實質を高める爲めに新しく官制を設け専門の官吏を置くこと。

等の項目を掲げて専ら教育の普及向上に關し努力するところがあつた。又單に専門の教育のみならず、社會教育の普及發達にも大いに力を傾け、當時漸く社會の秩序が亂れんとする傾向のあるのを察して、諸般の改革は焦眉の急務なりとて其の著政談四卷中にこれに對して一々項目を設け大いに力説するところであつた、徂徠は斯くの如く單なる儒者として子弟を教導したのみでなく、歴代の將軍に仕へ殊に八代將軍吉宗の

信任を受け施政上の事に關しても大いに其の經綸を發揮し、貢獻するところが多かつた。又彼の文才は徳川時代隨一の稱があり、教育家として、將又政治家として、文章家として嘖々の名を後世に傳へられるに至つたのであつた。

第十節 折衷學派の教育

一、折衷學の唱導

徳川時代は學問が著しく興隆を見、既に上述の如く朱子學派あり、陽明學派あり、又朱子陽明の學派に満足せずして學問の眞體は古學より他にはなしとて古學派を爲すものあり、互に其の學說を高唱して以て他派を壓せんとするの傾向があり、自らの立場を守り、他の學派を非難攻撃して眞理の追求は第二段の目的とし、如何にして他の學派を壓迫せんかと云ふ如き事に汲々たる有様であり、學問は遂に一種の勢力争ひの具に供せられる如き惡弊が生じて來たので、斯かる情態を快よしとせず、自らの學派を擁護する爲に他派を攻撃するが如き事を捨て、各學派の長所を探り、公平なる見地に依つて眞理の探求に努め様として來たものが所謂折衷學派で折衷學派にも程朱の學說を折衷せむとするものあり、又は儒學中の凡ゆるもの、長を採らむとするものあり、自ら又一派を形造つたのであつたが、この學派に屬するものは何れも各學派の長所を融合せしめたものであつて、其の學說も廣く儒學の長所を撰り抜いて一派をなしたものである關係上學說は區々であるので、特に引用することを避け、折衷學派中教育說に於て最も見るべきものを残した細井平洲に就てその教育說を引用するに留むることにした。

二、細井平洲

1、小傳 平洲は個性の尊重と、自然主義的教育思潮に就て徂徠よりもこれを詳しく述べた人であつて、彼の教育說中には多く見るべきものがある。平洲は益軒、徂徠よりも十數年後の人であつて、享保十三年尾張國知多郡平洲村に生れたのであつた。名を徳民、通稱は甚三郎と云はれ、平洲とはその號であつた、十六歳にして志を立て京都に遊學したのであつたが幾許もなくして歸郷し、中西淡淵に就て教を受けた、十八歳にして長崎に赴き、小河仲栗を師として大いに勉學に努め、良友飛鳥子靜を得るに及びて其の學は遽かに進んだ、斯くて長崎に居ること前後三年一意専心勉學に努めたのであつたが、偶々其の母の病氣が篤いことを知つて歸郷し、淡淵に就て勉學に勉めたのであつたが、平洲が二十四歳の時淡淵は居を江戸に移したので平洲もこれに従つて江戸に出で、嚶鳴館と云ふ私塾を自ら開いて貧苦と闘ひながら勉學に努めたのであつた。淡淵の歿後は秋山玉山、瀧鶴台等と親交を結び、専ら子弟を教導することに餘念がなかつたのであつたが、其の學識は漸く天下の認むるところとなり、諸侯の中で平洲に師事する者が多かつた、それ等の中で米澤の上杉鷹山公は特に平洲を厚く遇し、平洲も鷹山公の知遇に感じて四十四歳の時米澤に赴き、鷹山公をはじめ米澤の藩士に教を垂れたのであつたが、鷹山は益々平洲を重んじ、遂に一國の師表として彼を仰ぐに至つた、其の後數回に涉つて鷹山の請に依り米澤に赴き、米澤藩の施政に關與して大いにその隆盛を來たさせたのであつたが、平洲は又尾張侯の知遇をも受け、尾張藩の教育施設に就て幾多の改革を行ひ大いに刷新の實を擧げたのであつた。時に齡五十三歳であつた。平洲は斯くの如く諸侯の間に厚く知遇を受け、米澤に於ては興讓館の設立に關與し、尾張に於ても明倫堂の改革に力を致し教育上幾多の功績を残して享和元年七十四

の高齡で歿したのであつた。

2、教育説 平洲の教育説を知らむとするには、嚶鳴館遺稿に據るべきであるが、その中に次の如きことが述べられて居る。

玉磨かざれば器を成さず、人學ばざれば道を知らず、故にいにしへの聖主賢君かならず學宮を建て、人を教へる所とす。

とて教育の必要を述べ、古の聖賢と仰がるゝ人は何れも教育の機關を置いて人々を教化したとて聖賢たるものは教育の事を特に重く視、國を治めるに當つて先づ教育を以て人民の質を高めることに努力したことを例證し、更に、

凡人の生質美善なりといへども、古の道を學びしならざれば、思慮通融することあたはず、自分の心をみ定期にして、人を取扱ふゆゑに、たとへばさしがねなくて角なるものを作りぶんまはしなくて圓なるものを作るが如し。

更に又、

法度はすみかね、役人は大工、下民は材木の如し、すみかねあれども大工なく、大工あれども材木なくば、いかでか造作をすべき。又すみかねよからず、大工下手にて、材木あしくば何を以て細工の手際を見すべき、さればすみかね、大工、材木みつ揃ふやうにとて、教學の道は、人君の貴きより、下民のいやしきまで、第一のわざとはすることなり。古の聖主賢君天下國家を治め給ひし掟は、くるひなきすみかね也。このすみかねを能遣ひ覺る人は、上手大工となるなり。

この一文に依つて平洲の教育説の如何なるものであるかを知ることが出来る。即ち平洲に従へば教育は治國

平天下の根本を爲すものであつて、君主たるものは教育に依つて天下國家を治むるの素を養成し、下民は教育に依つて國家を形造る爲に優秀なる質を養成せんことを欲するものであつて、これ等が理想的に行はれてはじめて治國平天下の實を擧げることが出来るのであると説いて居る。

故に其の教育の理想とするところも、君主は君主としての理想があり、下民は下民として教育を受けねばならぬ義務がある。併し乍らその歸するところは何れも徳を養ふことであつて、君主は君主として有徳の君主たらむとして聖人の道を學び、以て徳を臣下及び賤民に傳へてこれを模倣せしめ、君主の恩恵を下民にまで傳へる様に心掛くるべきであり、下民は又下民としての徳を養ひ、其の本質に従つて社會の爲に盡さなければならぬと云ふのであつて、斯くすることに依つて國は圓滑に治つてゆくものであつて、前に引用した、「すみかねあれども大工なく、大工あれども材木なくはいかで造作なすべき、又すみかねよからず、大工下手にて材木あしくば、何を以て細工の手際を見すべき」と云つて居る言葉の眞意も亦これに他ならぬ。

又教育は君主は君主としての分に應じて、下民は下民としての分に應じて行ふべきものであつて、其處に自らなる差異があり、皆同一の型にはめて教育することは不自然であり、それぞれ、其の本質に向つて、大なるものは大に、小なるものは小に教育を行ふべきであると述べて居る。

平洲の教育は純然たる自然主義であつて、自然界に於て草木が成長する如く、人の教育も行はねばならぬといつて次の如く述べて居る。

凡そ草木を植そだつるに、二葉三葉より成長して、用に立つ木草となるまでには、始中終の三段あり。草に頸草あり、木に堅木あり。然れどもそのはじめ苗草、苗木の時は、何れもしなやかにして、直にもそよ

ぎ、曲てもそだつべし、是其始なり。既に草となり木となれば、頸き質の草木は、年月につよみわたりて、副木を立て、繩をまとひて、のべかめんとすれども、最早心のまゝならず、是中也。花咲き實なり、枝さし葉茂りて、それぞれの用に立つ程になりおふせたるは終也、まづこの始中終の養ひに心をつくべきこと也。苗木、苗草の時より心をつけて育つれば、苦勞もなく良草、良木の用をなすこと也。しかし苗木の自由になればとて、無理に曲撓めて、心のまゝにせんとすれば、いかなる頸草堅木も、或は枯れ或はいたみて、たとひ年月を経ても、いじけひねびて、材用に備ふべからず、草木のみならず、禽獸も又しかり。駒兒犢牛子猫の育まで、始中終はあるもの也。故によく獸を飼ふものは、始中終に隨ひ、無理をほどこさずして、それぞれの生を遂げしむ。人は萬物の靈貴なるものといへども、始中終のあることは、聊かも異なることなし、故に古の聖人、教誨の道をつとめて、人情を遂げしめ給ふ。尊卑貧賤、品かはれども、教といふ道をすて、生命をたつべき道なし、さて其の教の法に、始中終をわけて、天の性に逆ひもとらぬやうに定めおき給ひしこと也。

とて教育の階程には始中終の三つがあり、すべて幼少なるものを其の始めとし、強壯なるものをして其の中とし、老衰せるものをその終として、各その階程に適應したところの教育の方法を講じてゆき、その本性を充分に伸展させてやらねばならないと説いて居り、これは個性を認めそれを自然的に發現せしむる教育法であつて、當時の教育説としては傾聴に價するものである。而して人に對する始中終階程に就てはこれを次の如く區別して居る。

人の始中終は、幼少を始とし、強壯を中とし、老衰を終とす、この三時に隨ひ、教誨を施す法、一同ならずといへども、先づおほよそを語らば、聖人の教は乳をふくみて眠り、飯をくくめられて戯るゝ孩兒に

は、元服して上下着こなしたるものゝわざをさせず、上下着こなして元服したればとて、頭はげて額にしのよりたるものゝ思慮分別をせめず、少壯老の三の時に從ひて、其みとなるべきことをなさしむるやうに教ふること也。

とて其の三期の階程とこれに關して其の時に從つた教育をなさしむるのが最も理想的な教育法であると述べて居る。斯くの如く平洲の教育説なるものは、草木、禽獸の成長を理とした自然の法則に適應して教育の根本義を定めたものであつた。故に教育法の如きも極めて自然の順序を尊重したのである。次に引用する一文は人を教育するに對しての心得であつて、たしかに一家の見をなしたものと云ふことが出来る。

人は萬々の靈にて、心もまた靈知はやきものなれば、苗木苗草の時より、其身其程につれて善心、善行にむかふやうにと導き教ふることも、また大事の教也。無理にまげたわめねども自然に成長せしめて、それぞれの徳を成就せしむることいたらぬ所なきは、聖人の教なり、すでに胎教と云ひて、懷妊のはじめより、視聽言動をつしませて、生るゝ子の吉祥を望むことなれば、まして生れたるうへのことは、申すにも及ばざること也。故に教の道は先づ第一に教へる人の善惡邪正を撰にありて、幼弱當身の上をせむるのみにあらず。習慣は自然の如しと、孔子も仰せられて、人君の尊貴なるより、衆庶の卑賤なるに至るまで、その習慣とするところを慎むこと、人を教ふるの極意なり。

とて幼少の頃から習慣付け、出來得る限り善き習慣をつける意味に於て教育者は自身の善惡邪正を嚴にしな

ければならない。とて習慣教育の必要を説き、更に個性を尊重することに對しては、
師長はまづ自弦草を帶すべし、剛柔利鈍其才のまゝに取量ておのゝ一器物に備ふるは、人を用ふる法にて、人を教へる法にあらず、求也退。故進之。由也兼之。故退之。とのたまひしを以て仲尼の人をと

りかひ給ひし容子をおもんみるべし。きゝ馬は手綱をひかへ、弱き馬は籠を入れて、才不才もろともに進む様に心を盡すべきことなり。

とて個性を尊重することを述べて居る。この個性尊重の教育法は當時最も新しい説で、徂徠も大いに趣を同じうして居るところであるが、平洲は又一面に於ては人を教ふるに當つては出来る限り正しくせんが爲に教師たるものは極めて正確なる智識を必要とすると共に、其の人格も亦高く持して居なければならぬ。教育の第一歩が善き習慣をつけしむることにあるに於て教師たるものはよい人格の反映を子弟に投げかける様になければならない、とて次の如く述べて居る。

教あり類なしと、孔子のたまひつれば、人はたゞおしへ次第なるもの故に、教へる人を選むこと、最初第一の要なり、曲れる木を立て、直なる影を得べからず、よからぬ教戒の下に、よき人の出べき道理なし、但し直なる木をたて、正しき影を求めんとすれども、日月の光なくしては、かげはさゝぬものなり。師傳の禮を尊からしめ、その威を嚴にあらしめ給ふことは、先君の命壽を尊くし、愛敬をあつくし給ふより始ることなり。いかばかり忠賢の士とゞへども、受るところの命いやく、遇せらるゝところの恩疎なれば、世子の畏敬をおこすべき道らし。

とて教育に携はる人を選ぶことは最も大切なことであると同時に、直なる木を立て、正しい影を求め様とするにも日月の光がなければその影を得ることは出来ない如く、人が正しい成長を計らうとしても其處に師と仰ぐべきものが無ければ到底期し難い、故に師長をば尊敬し、師長の威嚴を一層大きくすることも必要なことだと述べて居る。

又教育は單に師に依つてのみこれを委せておく事は到底完全なることを期し難い、それは師が如何に高德

の人であつて、これを徳化しやうと努めても日常側近に居る者が正しからざるものであつたなら、自然と其の影響を受けて完全に教育の目的を達成することは出来ない、とて側近に居る人の人格も極めて大切であることを説いて、

師傳一人忠良を得といへども、近習の臣和一ならざれば、養長の道運することなし、幼き御心にて、誰彼がいへる所はよく、たれかれが申し、所はよからずなど、辨別し給ふべき道理なし、一かたにては宜しと申し、一かたにては悪しと申し、一人とふるまへば、又一人はかくして見せ奉るときは、かならず心まどひ給ふて、はては自己の心よく思ひ給へるかたに落着し給ふより外はなし、これ教への敗るゝところなり、師傳一人いかばかり忠誠を盡し候とも一齊人に衆楚言のたとへにて、遂には多勢にさまたげらるゝを、よんどころなきこと也。且つ又師傳は世子の尊敬し給ふ人といへども二六時中、前にも伺候せざれば、退て後は近習の臣師傳の教へ奉りし言行をすゝめ、諭し奉るを以て、習慣も熟し給ふことなり。若し又近習の臣、一言一行も師傳の教へを軽んじ侮とみせ奉れば、これぞ一日あたゝめて十日こごやかすのたとへにて、習慣も敗れ給ふもの故に、ひとり師傳のみにあらず、近習の臣に忠良を選ぶこと又大事なること也。

これは現在謂ふところの環境教育であつて、平洲も亦この環境教育の重大なることを上述の如く説いて居る。

平洲は又教授の順序に就ても大要次の如く區別して居る。

第一階 四書五經の素讀。

第二階 素讀がすめばこれに解釋を加へて以てその義理を正しく辨へ知らしむ。

第三階 四書五經其他の書物に依り辨へ知つたところの義理を實行に移させ、以てよき習慣をつけさせる。

以上の如き三階に區別して教授することが最も理想的であるとなして、これを次ぎの如く述べて居る。學問を致し候と申するには、四書五經を読みならひ、夫れより其義理をそろく辨へ候て、少々宛にても身に行ひ申事に御座候。

又は、

學館學生の業は、四書五經を素讀して、文字訓點正しくよみ覚えさせ、次第に講釋を承り、そろく義理を辨へ知りて、ちと身行を習慣爲し致候て、其のうち奇特の者を御褒め可被し進事に御座候。

更に又、

入ては孝、出ては悌とよみ覚え申候得ば、不_レ及迄も之を心がけ可_レ申事、言忠信行篤敬と有_レ之候へば、不_レ及迄も之を守り可_レ申事、それを不_レ負_レ所學と申候。書物にて朝夕讀候得共、一向に言行は其の所とは違申候ては、盡く學ぶ所に負きたる人にて不良人に御座候。

以上引用した三項中最後の項に依つて平洲が如何に學問を實行に移すことに重きを置いて居たかと云ふことが分る。

又教師たる者の常に心得て置かねばならぬ點に就ても次の如く述べて居る。

師傅の人は幼少をいつくしみ、あはれむ心を第一にして、大木のかげになり、ひなたになりて、風雨をさへへ、其かぎに苗木の成長する所を、片時もわするまじきこと也。とにかくに習はぬ經はよまれずと云へる世語の通り、古今の教訓に通じ不申候ては、師傅の忠を盡さんとしても、行届かざること多かるべし。

しからば先道を學ぶべきこと、師傅の要務なり。

又は、

師長の任は人に信ぜらるゝにあり、人に信ぜらるゝは、己が守りの堅固なるにあり、己の守りの堅固なるといふは、いつまでも同じことを退屈せず、人の信不信を問はず、勤め行ふことなり、久しくおこたらず、人の信は其中より生ず。

又は、

師長と申者は、先人に信ぜられ愛せられずしては不_レ參事に候。人に信ぜられ候得ば、悦服して畏敬の心も生じ申事、自然に御座候。人を悦服爲し致候事は、第一言語容貌を慎み可申事に候。

更に又、

能を教へ、不能を矜み書生の成敗を己が任として、孝悌忠臣、仁義遜讓の行義を習慣せしめ、一館の父母となりて、善を成し惡を掩ひ、厚をかさねて、教化の道を補助することを、終食のまも油断なく心得べきこと、師長の極意なるべし。師長の嚴なるを尊ぶといふことは教訓の法を嚴正にして、子弟に怠慢を生ぜしめざる様に取りあつかふこと也。面を四角にし膚をはり、鞭朴をとりしばかりてあやまちあるは責讓せんとせしめざるを、嚴にするはいふべからず。

とて教師たるものは子弟に對して愛憐の情を傾けること、人に信ぜられること、子弟の成功失敗は常に自分の責任であると心掛けて教訓を嚴正にし以て其の行を誤らせない様にしなければならぬと説いて居る。

大要上述に依つて平洲の教育説は盡したところであるが、平洲の教育説は極めて温健着實であつて、特に目立つた誤謬や、缺點を發見することは出来ないが、又その半面に於ては獨創味に乏しいと云ふそしりのあ

ることは止むを得ない。要するに平洲は儒學の凡ゆる長所を探りその短所を捨て、公正なる教育説を立てた人であつて、自然主義に依る教育説を主唱し、劃一主義に依る教育の弊害を認めて個性教育に重きを置いた、實踐教育家であつて、この點平洲が折衷學派中重きを爲す所以である。

第十一節 獨立學派の教育

一、獨立學の唱導

折衷學派は單に諸學派の長所を探つて此處に渾然とした一つの學派を爲したものであつて、其の思想は各派の色彩を多分に包含して居り、それを一つに統一しやうと云ふ點に一種の不自然さがあつた。故にこの學派としては各學派の長所を集成しては居るが、これを一貫した思想に依つて統括することは不可能であつた。この短所を補ふ意味に於て新に唱導せられたものが所謂獨立學派であつて、三浦梅園、二宮尊徳其他の奉ずるところであつた。この學派は單に儒教を研究するのみならず、廣く佛教、神道、道教等をも研究し其の長所を探り、全く自由なる態度と獨創的な思想とに依つて唱導せられたものであつて、他學に對する特徴とするところは或る一定の規劃に依り考證を行ふ如きことを避けて、獨特の見地から自由なる考證を行つたこと併して學問をして理論偏重に陥らしむることなく、實際生活に役立たせ様としたこと。又は研究範圍を單に儒教のみに求はずして廣く佛教、神道、道教等に置き、其の長所を探つてこれを一貫した見地に依つて統一しやうとした事、大義名分を特に重んじ、神道を深く研究して以て日本主義を發揮した事等を擧げることが出来る。

二、三 浦 梅 園

1、小傳 梅園は享保八年豊後國杵築に生れた、名を晋、字を安貞又は安鼎と稱し梅園はその號である。幼少の頃から性穎敏で、藩の文學たりし綾部綱齋に就て教へを受けたが、綱齋は梅園の非凡の才を知り、到底自分如き者の師たる人物でない事を知つて、中津藩の文學として當時九州に聲名高かつた藤原貞一の門に薦めて學ばしめるに至つた、以て梅園の非凡の學才を知ることが出来る。貞一の門に於ても其の俊才を認められ、この當時から梅園は天地進化の理に疑惑を抱いて専心この研究に耽り、遂に二十歳の頃星學の書を得るに及びて大いに喜び、これを熟讀して自ら天體の觀察を行ひ、天球儀を作つて天地に條理のあることを知り、遂に條理學なるものを獨創するに至つた。梅園の著書中有名なものは玄語、贅語、敢語、價原論等であり、これも哲學者として、又教育家として其の全面貌を髣髴せしむる良著であつて、特に價原論の如きはアダム・スミスの富國論にも比すべきものであつて、梅園の博識を物語るに足るものである。梅園は又資性極めて謹嚴で、併も人に接して濃厚、よく人を容れ、常に清貧に甘んじて門生を教導するを以て終生の事として居り、寛政元年六十七歳で歿した。

2、學風 梅園は前述の如く天地に條理のあることを覺つて、これに基いて思想の根柢を形造つたのであつて、これが則ち梅園の條理學である。

人の言に曰く、火は陽なり故に熱し、水は陰なり故に寒しと。晋は則ち以爲らく、陽なるものは何すれど熱き、陰なるものは何すれど寒きと、人の言に曰く、陽は軽くして昇り、陰は重くして降ると、人の思ふや此に至りて止むも晋の疑や是に於て已に甚だし。

とて天地の諸現象の悉くを疑ひ、思索に思索を重ねて遂に前述の如き條理學なるものを創説するに至つたのであつて、更に其の理を説いては、

天地に於けるや荒唐散漫として説き、生死に於けるや恍惚曖昧として言ふ、驗を僻に取り舌を空に懸く、人は則ち意に介せざれども、晋は則ち釋然たる事能はず、反覆して之を思ひ沈潜して之を釋ね、俯仰の間に小窺あるに似たり、竟に自ら量らず、此に斯述あり蓋し斯述たる、一々の條理に由りて以て則ち天地に取るなり、則ち敢て古を計校せず、造語已に由るあり云々。

これが梅園の思想の根本原理であつて、またこれは天地間の最高原理で、これに依つて宇宙も説くし、又道徳をも説くことが出来るものであつて、この宇宙間の最高原理こそ凡ての學派の歸一するところであると考へて居たのであつた。又歸山銀に、

道小なるに非ず、人これを小にするなり、世の學者門戸を立て區域を劃するより、大にして儒とも、佛とも、道とも分れ、佛中には顯と云ひ、禪と云ひ、淨土と云ひ、法華と云ひ、儒には朱子、王陽明、徂徠、仁齋など枝又枝を生じ、派又派を分つ、廣き天地の誰惜む者世界をへりきりて人に與ふ。

とて天地に基礎を置いて其の學説を立て、儒と云ひ、佛と云ひ、何れも天地間の條理に基くものであつて、各派の別あることは唯その枝葉に過ぎず、根本は一つなる天地の條理に歸するものであつて各派の別あることは唯その枝葉に過ぎず、根本は一つなる天地の條理に歸するものであるとて極めて自由な立場から解釋し、これを説いたのであつた。而して又、

天地はたゞ一氣物なり、氣外に物なく、物外に氣なし、一條の妙理宇宙を貫徹し、支界際なく、初代測られず。

これに依ると梅園は氣一元論を説いたのであつて、宇宙間の諸現象はすべて氣の然らしむるところであつて、氣以外には何等の物も存在しない、その氣が斯くの如く萬象として形體を爲して居るのは氣が縦横に錯綜して居るからであつて、萬物は自づから統一せられたところの一元的法則に依つて成り立つて居る。それは氣の一元に依つて形造られて居るからであるとして氣一元の哲學説を立て、すべての事を是に依つて律してゐる。

梅園の學説は上述の如く氣一元論に依つて成されたものであつて、教育説も亦これに負ふ處が多くこれ等では特に目立つたものはないが、彼の所説中最も有名なものは國體論である。當時多くの儒者が支那崇敬に傾いて國體の尊嚴と云ふ事に關しては等閑に付する傾があり、殊に徂徠の如きその甚だしいものであつたが、梅園はこれを痛く慨き、我が國體の萬國に其比を見ない點を大いに唱導し君臣の分の紊るべからざることを述べ、大義名分を明らかにしてゐる。

天下に二尊あり、君と曰ひ、父と曰ふ。故に人の臣たるもの、不幸にして變に遇はゞ、則ち宜しく諫めて死すべし。

とて君臣と父子の關係を述べ、これは犯すことの出来ない天地間の條理であるので人たるものは若し不幸にしてこの變に遇ふ時には極力これを諫めて成らざる時は死し、以て名分を明らかにすべきである。

又萬世一系の天皇を崇め奉り、以て國體の尊嚴を明らかにしやうとしては、

王は則ち天下を有するの名なるを、遂に人臣の稱となす、これを行ふこと已に久し、天下の耳目之に熟す、勢實に復し難きなり、本邦上古淳樸、天子未だ別稱有らず、唯だ尊者を美御徳と稱す、漢字を用ひる者は尊を以て之に充つ。

神武之後、阿毎主明樂義と稱す、阿毎は天なり、主明樂義は猶ほ偶經上と謂ふが如し、四表に君臨するの謂なり。義に由つて皇の字を以て之に合す、故に阿毎主明樂義上を天皇と謂ひ敢て天皇を斥言せず御門と曰ふ。猶ほ彼のまゝ之を大家と謂ふが如し、譯者以て帝に合す、天子の子を大君と曰ふ譯者以て王に合す、譯義を漢字制に取り、和語漢字に合す、其の主に合すと雖も其の名たるの義は則ち各同じからざるなり、是に由て之を觀れば本邦王の字を用ふるは、皇帝の字と其の義同じからず、今此に私に譯義を立て、曰く、王は大宮なり、天子の子を曰ふ。是其の正義なり。

とて日本に於て天皇の稱あるは支那の皇帝と謂ふのとは自づからにして其の意を異にするものであつて、當時一般に行はれて居た觀念の誤りを正し、以て尊王の實を挙げ様として居る。これはこの時代として將に特筆に價するところであつて、この外に國體の優秀を誇り、萬世一系の皇統を明らかにし、君臣の分を嚴にする等専ら力を傾けたところであつた。

3、教育説 梅園の教育説は平州のそれと著しく近似點があるが、平洲程自然主義を尊重して居らず、教育はあたかも名刀にねたばをつける様なものであり、名刀は既に名刀としての資格を有して居るが、これに更にねたばをつける事に依つて更に切味をよくする如く、人は既に人としての長を持つて居るが、これを教育することに依つて更に一層の輝きを發揮し、有用の材となるのであるとて次の如く述べて居る。

庭に栽る草木を伸びたるを抑へ、倒れたるをたすけ、繁れるを洗し、長きをたちてこそ自然とおもしろき姿も出来るものなれ、人の子を生育んも、有のまゝにして教へなかんはおしき事なり。五穀も生たるまゝにて草する事もなく、培ふこともなくば、かならずよくはみゆるべからず。兎角手を入れてだによく登ることは稀なるものなり。生付よしとて教へざるはよき刀とてねたばつかぬが如し。よき刀のうへにねたば

付たらんには、なをくよくきれぬべし。性質うつくしからんも、裸になして出したらんには文なくぞあるべき。うつくしき人にうつくして衣紋引つくりたらんこそ、本意なるべけれ。よきといふにかぎりなく理に窮なければなり。聖人の智も學事をすてず、ましてや其以下の人をや。犬は無智のものながらよく教へたるはさとく、おしへざるは用に立たず。又は愛に溺れて、わきの人を指南さへ親の心に僻事とおぼへ、唯さむからん、ひもじからんとのみ思ひ、その我儘氣隨もやがて直らん、長とならば家業にもとづくべしとおもふ内、月日人をまたねば早指南の頃もすぎぬ。心ありてよき事いふをば、渠をにくむと心得、白地にそしりにくむ。是劍のうへに蜜をぬりて小兒にあたふるが如し、一旦あまく快よしといふとも遂に舌をやぶるべし。『世の中の麻は跡なくなりけり心のまゝのよもぎのみにて』といふ如く、麻なくしては、よもぎもおもふまゝにゆがみねじれて蕪るべし、おやたらん人の分には、それぞれの師をもとめよくよくおしゆべし、其上にあしからんこそ子の罪なるべけれ。

これに依つて梅園の教育説を窺ふことが出来る。即ち名刀にねたばをつけるは一層その切味を増す如く、又美人に美服を纏はせると一層美しくなる如く、人は教育をすることに依つて一層役立つ様になるものである。故に親たるものは出来る限り子を教育することに心がけねばならない、親が出来る限りのことをして子を教育しても、その子が尙且つ不良の子であつたら、それは親の罪ではなくして子の罪となるものである。と述べて居る。

梅園の教育理想とするところは君子の養成であつて、これは特に梅園独自の見解とするものでなく、先人の説を繼承したものである。唯梅園に於ていさゝか君子の解釋を異にして居る點は儒教本位の解釋をせずして、これに宇宙の條理なるものを織り混せて君子を解釋しやうとして居る點で、

職士農工賈ありと雖も、而も上一人より下億兆に至るまで造化を賛するを以て職となす、上一人より下億兆に至るまで、其地を守るを以て分となす。

又は、

人の世は人と伴ふ習なれば、其の亂るべきを治め苦しむべきを安じ、飢るには其食に就かん事を謀り、凍るには其衣着なん事を謀り、人家のさび病るをば助け安んじ、幼き孤など救ひはごくむ様ぞ、造化を助ると云ふものにして上御一人の御身より、下士農工商に至つては唯造化を賛くる事のみこそ、人の天に仕るの道なれ。

等と述べて君子を説明して居る點が、分幾趣きを異にして居るところである。

又教育の方法としても個性教育を重んじ、人は各々其の心が異なるものであるから各人各様に相應した教育を施さねばならないとて、

人の才同じからず、國の政を知るべき才あり、敵をきり旗を奪ひ城をとり山を砕くの才あり、國の財を量り用をととのへるの才あり、他國に使い君命を辱ざる才あり、よく君をいさめ人を規すの才あり、その品さまざまなり。

とて人は各々其の才能が異つて居るものであるから自分では是とするものであつても才能を異にしたものに對してはこれを非とする者もある。依て教育は劃一に行ふべきものでなく、その才能に適應したものを施さねばならないとて個性教育を唱導して居る。

又梅園の奉ずる教育上の主義は、彼自身が極めて努力研鑽を重ねた人である丈に、努力主義勤勞主義等の自力的なものを奉じて居た。梅園叢書の『學に志し藝に志す者の訓』なる項に次の如き一節がある。

今の人、或は學に志し、あるひは藝に志すもの、一旦憤を起し、晝夜わかたず努めはげむといへども、已に一月を経半月を過ぎ、怠る心はやく生じ、吾つとめの至らざるとはいはで、生質の過に誘す。馬ははやしとて朝暫はしりてやまんに、いかでか牛の終日あるかに及べき。谷間の石の磨け、井幹のまるくなるも、豈一朝一夕の力ならんや、今日やまず、明日やまず、今年止す、明年やまず、然して後そのしあり。人一生の力をその道に用るさへ、尙その奥儀にいたるはやすからず、況や我一月半月、乃至一年半年のつとめを以て、他人一生の功に比せんとす。思はざるの甚しきなり。

これに依つて梅園が如何に勤儉力行の人であつたか、又子弟を教導するに當つても勤勞を最も奨勵したことが窺はれる。更に自學のことに關しても、

親たとへ教へずとも、子たらんものつとめで、その道其藝をしるべし、吾もとめ得ずといふ事はなかるべし、或は博突に耽り、又色をこのむが如き、親のおしへなしといへども至らざるところなし、この心を移して道をもとめば、何事か求がたからん。

とて自から求めて之を學ばゞ何事もならないことはない、遊惰や色欲に對してはこれを習はずとも好むが、この道を學問に移して倦むことなかつたら如何なることでも達成出來ると戒めて居る。又『戲示學徒』とて九ヶ條を上げて諸生を戒めて居るが、これ等は以て梅園の教育方針を知るに足るものであつて、その内容は次の如きものである。

- 一、學問は飯と心得べし、腹におくが爲なり、かけものなどのやうに人に見せん爲にはあらず。
- 二、書物は金かしの帖のやうなるものなり、金なき人のもたらむは、澁紙ふむほどの用にこそ。
- 三、學問はくさきな様なり、とくとくさみをさらざれば、少し書を読めば少し學者臭し、餘計書を読め

ば餘計學者くさし。こまりものなり。

四、學文を芥の様におもふべからず。上に浮たるが程に下地の水も、今はのまれず。

五、學問は置所によりて善悪わかる。臍の下よし、鼻の先惡し。

六、學問は輕業のやうにするがよし、輕業は人を目の下に見おろし、人の天窓をふむものなり。

七、衣裳うつくしくかさり、人にすかれんとするは賣女なり。人の見る時所體をなし、人に譽らんとする

は歌舞戲のものなり。今の學者はどうやら此の眞似するやうなり。

八、碁のうち様は、いつにても、先をとれば負けぬものと、我しれり。とかく道理はのみこみよし。態の
きかぬが笑止なり。

九、足の皮はあつきがよし、つらの皮はうすぎがよし、人諸共に小賢しく口はきけど、行ひは女童に見限

らる。さる故面の皮あつくなり、足の皮うすくなり、株ふむ事多し。よく心得てつゝしむべし。

これ等の數ヶ條に見えることを教育上の重大なる目標として諸生を教育した梅園は、日常に於ける諸生の行動をも常に一定の規矩にはめてこれを律せしめ、努めて勤勞を獎勵し、自學自習を唱導して、多くの門下生を指導したのであつた。彼の教育家として心掛が常に如何なるものであり、又如何に謙虛な態度を以て門生に臨んだかと云ふことは、次の一文を以ても充分窺ふことが出来る。

人の禽獸にことなるものは耻を知るより大なるはなし、晋不肖の身を以て人の掌上之珠をあづかる事恐れ
て餘りある事なり。されば諸生は言を以てつかふべからず。鞭策を恐れ苦痛の爲に人の使令をうく、諸賢
堂々たる五尺の身即父母の遺體なり。身有て聞、智ありて辨ず、晋が口より出づるものは諸賢の胸臆にい
るものなり。なんぞ牛馬の如く鞭策を以て御すべけん。晋がむかしより杖ひざるは、牛馬にあたることを

知ればなり。

この一文に依つて梅園の全面貌を知ることが出来る。斯くの如く謙虛なる、併して熱誠なる態度を以て門生を教導したことは、徳川時代に於ける一流の教育家として許すことが出来るが、不幸にして梅園の哲學說なるものは相當に認められて、この時代に於ける第一人者とされて居るのに反し、その教說が廣く顧みられず、従つて教育家としての名聲が行涉つて居ないことは遺憾とするところである。この外に獨立學派として教育說にも大いに聽くべきものゝある人に帆足萬里、二宮尊徳等があるが、これ等は何れも大同小異であるので省略することにした。

第十二節 國學派の教育

一、國學の勃興

徳川時代は文運の大いに復活を見た時であつて、元祿の頃から漸くこの傾向が現はれ、伊藤仁齋に依つて古學が唱導せられるに當つて、從來朱子學、陽明學に限られて居た學界の分野が遽かに擴大し、學問は自由研究の思想に依つて行はれるに至つた。この影響を受けて勃興したものが即ち國學であつて、これは教育が普及し、學問が隆昌を來すにつれて漸く自覺しはじめた國家意識の發達に依つて、唱導せられたものであつて、國學者は從來の如く儒教の思想に依つて日本獨特の思想形態を説くことに幾多の不自然さを發見し、純粹なる日本思想を日本的立脚地に依つて研究しやうとしたものであつて、その端を開いたものは僧契沖であつた。契沖は始め眞言宗の僧侶として高野山で修業したのであつたが、歌學の研究に興味を覺える様になつ



てから古歌の研究に没頭し、特に萬葉集に對しては其の全生命を傾倒したところであつた。有名な萬葉代匠記は彼の著するところであつて、契沖の古歌の研究は遂に我が國民思想の本源なるものが、儒教と相容れざる部分が多い點を悟り、國學を唱導するに至つた。併し契沖のそれは學說として系統立つたものではなく、單に萬葉集の歌を通して國家意識の啓發を強調する位の程度であつて、未だ組織立つた學問と云ふことは出来なかつた。併し古語を通じて古代文化の研究を行ひ、古人の思想を検討したことが、遂に國學隆昌の端を爲したものであることは動かすべからざる事實である。その後宣文九年荷田春滿が出づるに及びて契沖の萬葉集を通した古代思想の研究は大いに組織立てられ、漸く學問としての體形を備へるに至つた。が春滿の研究も彼が『創學校啓』中に述べて居る如く、「古語に通ぜざれば古義明らかならず、古義明らかならずれば古學復せず先王の風迹を拂ひ、前賢の意荒めるに近し、一に語學を講ぜざるに依る。是れ臣終身精力を古語に盡さんとす所以なり」位の程度であつて、契沖より承け繼いだ古語の研究に就き學問としての土臺が作られるに至つたのであつた。これを受け繼いで學問としての組織を立て、大いに發展せしめたのは加茂眞淵であつて、眞淵は元祿十年の生れであるから、春滿より約三十年、契沖より約六十一年の後である。

眞淵は契沖、春滿等の先達に依つて示された古語の研究を推し進めて、古語を通して古代人の思想を知らむとし、以て國民思想の根幹を明らかにすると共に國學の基礎をこれに據らしめ、としたのであつて、人に依つては眞淵は歌學者としてこそ重きを爲し、國學者としては其の功績は極めて低いものであると爲すものもあるが、眞淵が斯様に單なる歌學者として和歌の研究に力を傾けたものではなく、萬葉集の歌を研究することに依つて、國民思想の源泉を探らうとしたものであつて、宣長が眞淵の事を述べて次の如く云つて居ることに依つても充分窺はれる。



われもとより神の御典をとかむと思ふ心ざしあるを、そはまづからごゝるを清くはなれて、古のまことの意を尋ね得ずばあるべからず、然るにそのいにしへの心を得むことは、古言を得たるうへならはあはたはず、古言を得むことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ、さる故に、吾はまづもはや萬葉をあきらむとする程に、すでに年老いて、のこりのよはひ、今いくばくもあらざれば、神の御ふみをとくまでにいたるところを得ざるを、いましは年さかりにて行さき長ければ、今よりをこたることなく、いそしみ學びなば、其の心ざしとぐるべし。云々

とて宣長を戒めて居ることの中に眞淵の國學に對する考へ方が充分に表はれてゐる。これを受け繼いでその輝かしき發展を招來したのは實に本居宣長であつて、宣長に依り國學は大成されたものと見るべく、従つて、宣長の教育説は國學派の代表的教育説と見て差支へはない。

二、本 居 宣 長

1、小傳 宣長は享保十五年伊勢松阪町に生れた。幼名を富之助と云ひ、彌四郎、又は健藏と呼ばれ十六歳の時宣長と改め、鈴の屋とはその號である。幼少の頃から醫者たらむとして其の學を修め二十八歳にして郷里松阪に於て醫業を開いたのであつたが彼は既にこの以前から國學に對して深い造詣を有して居たが、その學問は皆獨學であつて醫業を傍らとしての學問であつたので、未だ組織立つたものではなかつたが眞淵の冠辭考を手に入れて、これに依り大いに啓發されることあり。ひそかに眞淵に私淑して居たのであつたが、眞淵は當時田安侯に仕へて其の名聲が高かつたので志を述ぶるに至らなかつたところ、偶々眞淵が公用を以て松阪に來た時に宣長はこれに見え、指導を受けたのであつたが、眞淵も宣長の非凡の學才を認めて種

々懇切に指導したのであつた。この事があつて以來宣長の國學に對する研究は一層熱烈なものとなり、その生涯を國學の研究に捧げ、遂に古事記傳四十四卷の如き大冊の著述をなし、國學をして大成せしむると共に、數百人の子弟を養成指導したのであつた。

2、學說 宣長の學說なるものは契沖の思想と、眞淵の思想との混然融合して一體をなしたのであつて、契沖も同一の國學者である關係上、其の思想は相反する如きことはないものであるが、尙ほ詳細にこれを點檢する時は相當趣きを異にして居るところであつて、契沖は復古的自由主義を多く奉じて居り、眞淵は純然たる國家主義に依り學說を立て、居たものであつて、この點趣きを異にして居るのであるが、宣長は兩者を融合させて國學の大成を來したのであつた。

宣長は眞に古傳説を信奉してこれに依つて神の攝理を信頼し不動の學說をなしたのであつてこれを殆んど無批判的に信頼した。この點宣長の短所でもあるが、又彼の面目躍如たる長所と云ふことも出来る。故に宣長が樂天主義にして、國家的自覺をのみ尊重し、一途に忠君愛國を唱導したのも、其の根本に於て古傳説を無條件に信奉したことに依るものである。

宣長宇宙觀は古事記に記された宇宙論をそのまま奉ずるものであつて、空漠として果てしの無い空間に天御中主神、高皇靈神、神皇靈神の三神が出現し以てこの天地が創造せられたとするもので、人々の説くところの高天原とは、帝都の意でもなく、地上の何處にも存在するものではなく、それかと云つて天上に在るものもなく、これ等を超越したところの存在が則ち高天原である。高天原とは宇宙のすべてを掌る神々の在し申すところであつて、絶對的な存在である。宇宙は斯くの如くすべて神々に依つて造られたものであつて、人も石も木も草も皆神々の作り給ふところであり、これ等の中で最も畏き神は天つ日を知ろし召すところの天

照大神である。

斯くの如く神は天地間の萬象を形造るところの最も尊貴にして至高なるものであつて、神の道は唯一すぢのまことである。この一筋のまことにかなへば神の道に通ずることが出来るのであるが、この神の道なるものは、日本國にのみ傳へられるものであつて、外國に於ては、既にこの道は傳へられて居ない。故に日本の國が萬國に比ひなき光榮のある國であつて、日本國民たるものは須くこの神の道に副ふ様に一筋のまことをつくさねばならないと云ふのであつて、この日本國民が上代から榮光に輝く日本來の思想を研究しやうとせず、外國から移入した儒佛の教を奉ずることは大なる誤りである。と説くのであつて、宣長が特に一筋のまことを道と云はずして、神の道と稱し、世に云ふ道とは儒教の傳來に依つて傳へられたものであつて、日本在來のものではない、故に日本に古から傳へられるところの「まこと」をば特に神の道と稱したのであつて、これに關し古事記傳に次の如きことが述べられてゐる。

古の大御代には道と云ふ言擧もさらになかりき、其たゞ物にゆく道こそ有けれ、物のことわりあるべきすべ、萬の教へごとをしも、何の道くれの道と云ふことは、異國のさだなり。然るをや、降りて、書籍と云ふ物渡參來て、其の學び讀む事始りてのち、其國のてぶりをならひて、やゝ萬の上になまじへ用ひらる、御代になりてぞ、大御國の古の大御てぶりをば、取別て神の道と名づけられたりける。

と論斷して居る。故に宣長は一貫したまこと、即ち神の道こそは日本にのみ限られたものであつて、支那等に存在する理由がない。儒教や道教に道と云ふことを説いて居るが、これは國を治めるに當つて人に依り作られた教へであつて、以て神ながらの道の存在して居ないことが分る。とて儒教、道教、佛敎等の外國思想を極端に排撃したのであつた。

宣長の思想の歸着するところは凡て神であり、それ等の神々の中でも特に天照大神は尊い神であるので、日本國民たるものは常に天照大神の御心に副ひ奉ればよいのであつて、天照大神の御心は神勅に示されて居るので、ひたすらこれを體して神の道に精進しなければならぬと云ふのであつて、強烈なる國家至上主義を説いて居るのである。

3、教育説 宣長が教育の理想として居た點は、上述の如く國家至上主義を奉じて居たので國家至上主義を奉ずる忠君愛國の士を養成することが究極の目的であつた。當時支那崇拜が著しく行はれて居た時に當つて宣長のこの排外的教育思潮は多大の衝撃を與へたのであつたが宣長は一層強固に支那思想の排撃を行ひ、遂に『そもそも天下の學者、千有餘年、かの漢籍の毒酒を飲み、その文辭の口に甘きに耽りて、誰も皆酔ひ亂れたることを自ら覺えず』とまで極言するに至つた。

宣長は又人にはそれぞれ異つたところの天性があつて、教育もこの個性をよく考へてこれに適應したものであるから始めなければならぬと説いて居る。

人の生れつきさまざまあるものなり、物の義理、事の利害などすべて萬の事を、心にはよく思ひわきまへながら、口には之をいはぬ人もあり、また口にはよくいへども、しか行ふことはえせぬ人もあり、また口にはえいはねどもよく行ふ人もあり、又口にはよくいへども文には得書きいでぬ人もあり、又口にはえいはねども、文はよく書いづる人もあるなり。

それは明らかに個性に差異のあることを認めて居るものである。又その個性に適應したものを選んで學問をはじめることが肝要であることを述べては、

もの學に心ざしたらむには、まづ師をよく選びて、その立たるやう、教へのさまを、よく考へて従ひそむ

べきわざ也。まことにぶき人は、さらにも言はず、ものより智とき人といへども、大かたはじめに従ひそめたる方に自ら心はひかるゝわざにて、その道のすぢわろけれど、わろきことを之とらず、又後にはさりながら、年ごろのならひは流石に捨て難きわざなるに我といふ禍神さへ立ちそひて、とにかくしひことして、なほそのすぢを助けむとする程に、終によき事は之物せで、よのかぎりひがごのみして、身を終るたぐひなど世に多しかゝるたぐひの人は、つとめて深く學べばまなぶまにまに、いよいよわろきことのみさかりになりて、おのれまどへるのみならず、世の人をさへまどはすことぞかし、かへすがへすはじめより、師を選ぶべきわざになむ。

とて個性を充分に自覺して進むべき道を選ばないと遂には何事も爲し得ないのみならず、社會に害をさへ流す様な結果になる。師を選ぶことも亦これと同様重用な事であると戒めて居る。

宣長は教育説に於てはあまりまとまつたものを述べて居ないので益軒や平洲の如く特に教育説として見るべきものは少ないが、實際教授の事に關しては幾多卓見を發表して居る。これは彼が著述に研究に又家業たる醫事に力を傾くる傍ら多くの門生を教導した爲め、實際教授に依つて體得したことを述べたものと見るべく、次に述べる講釋法に依る、教授と會讀法に依る教授との比較論等大いに卓見と云ふことが出来る。即ち宣長に依れば徂徠に依つて大いに提唱せられたところの會讀法も初心の者に取つては幾多の弊害があり、それかと云つて従來の講釋法に依るものにも短所があるとして次の如く述べて居る。

さてこの講釋といふわざは、師言ふことをのみ頼みて、己が心も考ふることなければ、物まなびのためにやくなして、今やうの儒者などは、よろしかからぬわざとして、會讀といふことをぞするなる。そは講釋とはやうかはりて、おの／＼自ら考へて、思ひたるさまをいゝ試み、心得がたきふしをば、問ひ聞

き、かへさひもして、かたみにあげつらひ、定むるわざなれば、げに學問の爲に、よろしきわざとは聞え
たれど、それよしと之あらず、世の中にこのわざを見るに、大かたはじめのほどこそ、こゝかしこか
へさひ、あげつらひなどさるべきさまに見ゆれ、度重さなればおのづからおこたりつゝ、一ひらにても多
く讀みもてゆかむとする程に、いかにぞやおぼゆるふしぶしをも、多くなほざりに過す習にて、おほか
たひとりゐてよむにも、かはることなれば、殊に集ひたる甲斐もなき中に、初まなびのともがらなどは、
いさゝかもみづから考へ得る力はなきに、これもかれも聞えぬことがちなるを、ことごとく問ひ出むこと
もつゝましくして、聞えぬながらにさてすぐしやるめれば、さるともがらなどの爲には、猶講釋ぞまさり
てありける。

とて會讀法の缺點を述べ、初學者に取つてはむしろ講釋法による方が効果的であると述べて居るが、この講
釋法も前述の如く師の講釋に依頼し過ぎて、遂には自分から進んで學問をし、研究に當ると云ふ如き傾向が
乏しくなつて来て、向學心の妨げにもなるのであるとし次の如く述べて居る。

講釋もたゞ師のいふことのみ頼みて、己れ力いれむとも思はず、聞くことをのみむねとせむは、いふかひ
なくくちおしきわざ也。まづ下見といふことをよくして、はじめより、力のかぎりは、みづからとかく思
ひめぐらし、きこえがたきところは、殊に心を入れて、かへさひよみおけば、きく時に、心のとまる故
に、さとることも、こよなくして、わすれぬもの也、さて聞いて、家かへりたらむにも、やがてかへり見と
いふことをして、きゝたりしおもむきを、思ひ出で味ふべし。

とて講釋法を受けるには先づ豫習を充分にして置いて、自分の力で解釋の出来る範圍は努めて自分で解釋
し、どうしても分らない點は特に心に入れておいて、師の講釋を聞くべきである。又家に歸つてからは復習

をもよく行つて、覺えた知識を失はない様にしなければならぬと訓へてゐる。

更に筆記に依る學習法に就ても次の如き見解を持して居た。

聞書といひて、きくきくその趣をかきしるすわざ有、そはなかにわすれもしぬべきふしなどを、おろおろ
はいさゝかづゝしるしおかむは、さも有べきわざなるを、はじめより師のいふまゝに、一言ももらさじと筆
はなたず、ことごとにかきつゞくるかし、そもも講釋は、よく心をつめて、ことこのころを、こまか
に聞きうべきわざなるに、此きゝがきすとはきくかたよりも、おくれじと書く方に、心はいそがれて、
あわたゞしきに、殊によくきくべきふしも、かいまぎれて、きゝもらしあるはあらぬすじに、きゝひがめ
もするぞかし、然るにこれをしのみみしきわざに思ひて、いかでわれこまかにしるしとらむと、たゞこれ
にのみ心を入れて、つとむるほどに、もはら聞書のための、講釋にもなるたぐひもおほかるは、いといと
あぢきなきならひになん有ける。

これ等の説はその實際教授に際して體得した事に依るものであつて、興味ある點である。宣長の教育論なる
ものは、大要以上に記した如きもので、學者としては屈指の人であるが、教育説としては、益軒のそれの如
く、具體的に系統立てたものはない、それは宣長が國學者として、忠君愛國を主唱し、國體の萬國に比類な
き點を明らかにして神道なるものを世界に唱導することに全力を傾けて教育論等に至るまで力の及ばなかつ
たことに依るものであつて、宣長が教育家としても卓拔な手腕と識見を有して居たことは散見する實際教育
論が卓絶して居ることに依つても窺はれるもので、この點實際教育家として推稱に價するものである。この
外國學者の教育説として平田篤胤のものも見るべきものが多いが、あまり長くならないのでこれは割愛すること
にした。

第十三節 其他の教育説

一、武士道學派の教育説

武士道學派とは古學派の内これを創唱した山鹿素行は、伊藤仁齋、荻生徂徠等とは幾分趣を異にした學説を唱へたものであつて、素行は古學の研究に依り武士道を推稱して大義名分を明らかにし、尊王愛國の精神を作興することに意を注ぎ、遂に武士道學派を創唱するに至つたもので、この學派の代表的人物として吉田松蔭を擧げることが出来、武士道學派に依つて唱導せられた尊王の精神が遂に明治維新の大業を完成する導火線となつたものであつた。併乍ら素行及びこの一派の武士道學派に依つて唱へられた武士道なるものは所謂武士道即ち鎌倉時代に獎勵せられた武士道とは内容を甚だしく異にするものであつて、鎌倉時代の武士道は武士がその領主に對して取る道德であつて、一天萬乘の君に對して奉ずるの道ではなかつた。これに反し素行の唱ゆる武士道なるものは日本國民としての自覺を高め萬世一系の天皇に捧げまつる盡忠奉國の精神を呼ぶものであつて大義名分を明らかにし、尊王愛國の精神を以て一貫した思想であつた。

素行の學説は大いに國體論を説き、常に義を重んじる事を教へて居るが、それは省略することにして其の教育説のみを掲げることにした。

素行の教育説の根本をなすものは、人の人たる道を學ばしむる事にあつた。「人の氣質は皆本相同じ、而して其の學習は終に君子小人を爲すに至る。君子に至るものは、善を學習し、小人に至るものは惡を學習す」と述べて居る如く、人は何れも同一の氣質を以て生れてくるものであるが、善を學ぶか、然らざるかに

依つて君子たり、小人たるの差異が生じてくるのであつて、玉も磨かなければ光が出ない如く人も學ぶにあらざれば人としての價值を充分に發揮することが出来ないといふのであつた。

素行の教育の理想として居たものは聖人であつて、山鹿語類に次の如く述べてゐる。

聖の標準は聖人にあり、夫子は周公を思ひ、孟子言へば堯舜を稱す、是聖人を以て標的となす、猶射を學ぶに的を立つるが如し、

とて聖人を目標に學問をしなければならぬと論じ、これはあだかも射的を練習するものが先づその的に向ふが如きであると述べてゐる。素行は又、

聖人の學は日用卑近の間に在り、學者卑近を厭はず、愈々卑愈々近なれば則ち功夫愈々實にして其學日に新なり。

又は、

聖人の學は唯日用の間に在り、能く日用の歩々を窮盡すれば、其の節目紊れずして、其の綱領に本づく、是れ學の序なり。

これ等に依つて見て教育の主義とするところが専ら實用に重きを置いてある點が窺はれ、教育を日常の道德生活に役立て様として居たことが分る。更に又、

日用の事を以て卑近細碎となさば、乃ち學何等を以て極處となすか、後學皆此の感あり、日用學を描いて、或は讀書記誦を以て學と爲し或は靜坐心を甘にするを學となす、凡そ高きに登り遠きにゆくは、歩々相運びて竟に其の極處に到る、故に在天對越の上達、見來れば歩々相積の謂なり。

これに依り素行の實學主義が遺憾なく窺はれる。斯くの如く日常卑近なものからはじめ歩々相運んだなら遂

には高き位置まで進むことが出来るのである。讀書にのみ重きを置いて日常の事に意を傾けないのは眞の教育と云ふことが出来ず、書物は日常のことを全うして後讀むべきものであるとて、

讀書は弟子餘力の學ぶ所なり、出入起居、事物應接の急務を措いて、書を讀むに課程を立て是を以て學は讀書にありとなすなり、近世學者の弊、専らこの裏にあり、是れより學日用と差別出来る古聖人學校の設、常に讀書を以てするは未だ會つてあらざるなり、六經ありて世に傳はり、竟に科を立て讀書を專にする、豈古人蠢民を教ふるに此の書を以てせんや。

素行は斯くの如く讀書より日常の事を先にすべきであると説き、近代の學者と云ふものが一般に日用事よりも書物にのみ重きを置く弊害のあることは戒むるべきことであると其の弊害を非難してゐる。

素行は教育の時期に就いても、これをなるべく早くから行ふべきものであるとなし、母の胎内にある時から教育に心掛くるべきであるとして次の如く胎教に關し述べて居る。

凡そ既に母の胎内に感じては、母の血氣を分つて己が血氣とし、母の所感の善惡に感じて、これを以て己が才質とす。故に妊む時は、心の物に感ずる所を慎でその七情を節ならしむ、すべて母の感ずる所は、視聽言動思の間を不可出なれば、視ることきくことに付て心の感じ氣の動くをつししみ、云ふ言葉のあわてさはいで、内をうごかしめ、怒りせいで氣をたかぶらしむる。各其宜を失ふ也。其身行住坐臥の時、胎内の子にさはらず、四支五體の屈伸を節にして、子にきつつけそなふことあらず、飲食の時なつて内にあたり、そこなふべき食物を飲食せず、平生甞ぶ所のことわざにも、心の感ずる所を善ならしめ、見聞して知覺するの理を正しからしむれば、内に七情の妄に動することなく、外に邪氣の内を破ることあらざるを以て、出生するの子形容正しく、かたわなることあらず、才質各善に感じて人にまさるべし、是れを

胎教といふなり。

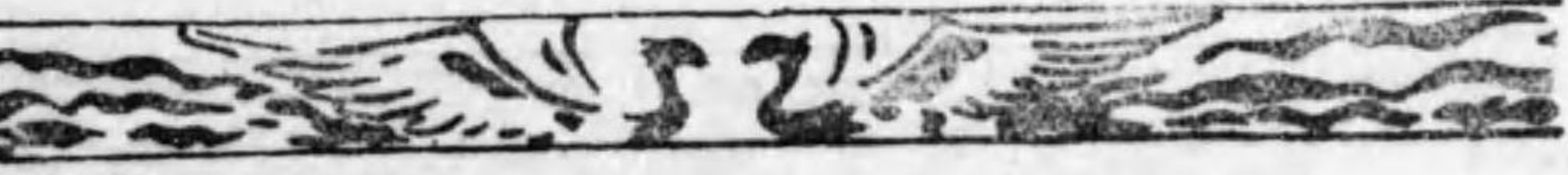
とて胎教の必要であることを生理的方面の事にまで言及して説いて居る。

又人が生長して相當な年齢となり學問に志を向ける様になると先づ自己の個性を自覺してこれに應じて志を立てるべきであり、學問の成るか否かはその頭初に當つて志を立てるか否かに在るとて、

學の成否は、唯一の志趣を立てるにある。夫子七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えざるは、十有五にして學に志せしにあり、其の志堅厚ならざれば、則ち其の學固からず、學志堅厚にして後其の勤勉するところやまず、古人日を愛し倦まず、鷄鳴而して致々、尺寸の陰を競に至る、是れ志の卓爾なり、後世の學者は讀書記問、終日己ます、是唯人たるの學、其の志趣く所尤も差謬す故に志の立つ所、未だ詳究せざるべからず、其の跡の徒に至るも亦志なり、豈疎忽にすべけんや。

とて立志の必要を説いて居る。これ等も素行の教育説を知る上に必要なことであるが、素行の教育説にして他と其の趣を異にし、斷然他を壓して居るのは心理的教育説であつて、素行は『節に従ふ教戒』とて心理的發達の如何に應じた教授論をなしたことであつて、これはこの時代の教育家又は學者が何れも心理的教育法を没却して居た時にあたつて、斯くの如き説をなしたことは賞するに餘りあることで、特に素行の教育説を引用したこともこの心理的教育説を掲げんが爲である。山鹿語類中に教育方針として節に従ふ教戒なるものに付き次の如く述べて居る。

ひそかに案するに、其節未だ至らざるをしひて教戒する時は、節を失ふが故に教戒皆煩勞して益なし、その節を詳に考へて、時分に相應いたせる教を專とし、其の間に先後本末を校量して、さきんすべきことを先づ教ふる如く仕るべきなり。子既に生まれて安靜ならしめて、其靜氣をさわがしめず、その養を時にし



て飽飢をはかり、既に笑語するに及んでは笑語の用を正しからしむ。是れその内にきざすところあるに任せて、外其事をたゞしみちびく也。出生せる赤子の笑語にも及ばざるに、聖經賢傳なればとて四書五經の書を講讀いたしおかせたればとて何の通するところあらんや、然りとて其教へをゆるやかにせよと云ふにはあらず唯相應の教あるべきのいひ也、而して子既に齒生する時は飲食を與ふべきの節なるが故に、既に飲食の禮を以てすべし、既に手に物をとる事を得ば、是に右を以てすべき事を教へ、取ることあらば友箸を取ることを知らしむ。是飲食の先んずることなればなり、子能くものを言ふ事を得ば、自分の名を云はしめ、父母の稱號をしらしめ、上下のいひやうを教へ、うけこたへの言をしらしむ、知あつて物を羞ることを知る時は、こゝにおいて長幼の禮尊卑の品をわかたしめて、言行各すでに恭敬の義を存す、子よくあゆむ時は行歩の禮をならはしめて安靜恭謙ならしめ、にはかにはしりあわてゝ行くことなからしむ。是等の教は別に法を立て學ばしむると云ふにはあらず、自然に涵養すべきの義なり。すべて幼児の教戒、その節、夫の時を考へ、其兒の質をはかりて、節をたがふべからざる也。節をたがふる時は、或は煩勞にくるしみ、或は不叶ことに其心をつからかして、小兒病氣出で、元氣おとろへて、長成り難く、つひにつとめ行ふことを得ざるになりぬべければ、其氣の趣向をはかり、義理にしたしそめて、不覺天徳を會し、人としては如く此あるべきことわりなると云ふこと平生にならばし、ひたすら以て教戒とすべき也。

これは素行の教育方針の根本をなすもので、斯くの如く兒童が自然に成長する度合ひに従つて教ゆる程度を高めてゆくべきで、この教育法は最も自然主義を尊重したものと見るべく更に進んで各年齢に順應し教育の程度を略々定めて居るのであるがそれに依ると大要次の如くなる。

一、三歳 以前の教育



1、 生れた時、 安靜にして飽飢をはかる。
2、 笑ふ頃、 笑語の用を正しくする。

3、 齒の生ずる時、 飲食の禮を教ゆ。

4、 握ることが出来る時、 箸の持方を教へ、右手にてすることを教ゆ。

5、 言語を使用し得る時、 先づ自己の名を知らしめ、其の後父母の名を教へ、人に對して返答のしかたを教へる。

6、 羞恥を感ずる時、 長幼の禮、尊卑の品を分たしめる。

7、 歩行を始めれば、 行歩の禮を教ゆ。

二、四、五歳 視聽言動のかた備はるを以て、視聽を正し、言葉をねり、嬉戲禮容をもうけ五倫の交接、飲食送答の節、其の會釋言語をしらしむ。

三、六歳 この頃より子供に習ふことを教へる。即ち教育の始めなり。

四、七歳 女子は血氣動きはじむるの歳なれば、男女席を同じうせしめず、男子には從順のことを知らせて、家職に精勵することを教ゆ、女子にも柔順のことを知らしめ女としての仕事を習はしめる様に心掛くべきこと。

五、八歳 この歳は小學に入るの歳にして、普通智力も氣力も全くなる時なれば、戒を強くして、讀書筆畫をも學ばしめ、起居飯食の禮を正しくせしむ。

六、九歳 男子は陽氣動くの歳なれば、凡て物事の理をしらしめ、大意を悟らせ、義理の大法を會得する様に導くこと。

七、十歳 は數の一成であり、十二歳で天地紀元一巡する故、男子を外に出して居らしめ内天徳を成し、外事物のわざをつくさしめる。

八、十三歳 は甲子はじまり、天地の氣めぐりはじめ、故に成童の禮を行ふ。

九、十五歳 以後この歳は大學に入るの年なれば、これより成童と稱し、幼稚の法を以てせざることを。

大要以上の如き區別を設けて各々其の節に従つた教育を行ふことを説いて居り、訓育法としては次の如きことを述べてゐる。

父母の子に教戒すること、先づ其の身を修慎せしむるを以て本となす也。

とて子の教育に當つては先づ父母が自らの身を修むることを以て先とし、然る後に之に教ゆるべきであるとす、更に、

子幼稚の間は、己が父を以て、天下の大富人、大貴人、才知徳業父にこゆるものあらざると思ふが故に、視聽言動各父を手本といたすもの也。況んや師傳保のかしづきなく、乳母侍女のたすけあらざらん匹夫の子を養ふは、父を以て師傳保にあて、母を以て乳母侍女に比するゆえ、一入父母の身をつゝしめ修めざらんには、子の則て習ふべきゆゑあらざる也。

又は、

子兒元來天性のまゝなるが故に、習ふによつて其の言行をなす、情欲既に長じては、其の氣にまかすことありといへども、是又見聞せざるときは、致すべきの用なし、されば近づき親しむ輩を選んで、其智を日々に長じ、其才をよく萬事にわたりて、其徳純朴正大なるにいたらしめんこと、是れ教戒の本なり、教戒と云へるは既にあしき處あるに及んで是れを教へ、戒をなすと云ふに似たり、實は然らず、平生養ふこと

ろを以て、自ら教戒とするなり。

とて兒童は見聞しないことは致さないのであつて、兒童の見聞は常に側近に在る父母、乳母等の感化を受くるものであるから、これ等の人は自ら起居動作を慎んで以て、兒童に範を示すべきであると戒めて居る。

素行は又教育行政上の事に關しても卓見を有して居た。即ち治國平天下の實を擧げ、民に道を正しく行はしめることは教育を盛んにするに如かず、教育は家府及びこれを延長した如き寺子屋等に於て行ふよりも一定の組織の下に統制せられて居る學校に於て行ふのが最も効果的である、依つて大いに學校の増設を計り、從來の如く單に書物を誦誦せしめることのみでなく、道徳を教ゆることが肝要であつて、これを學ぶには武士階級にのみ重きを置いても其の効果は望み得ない、宜しく各階級の國民に教育を授くるべきであつて、教育には士、農、工、商等の階級を設くることなく、又都に厚く、鄙に薄きことでもいけない、故に鄙に於ても各村々に學校を設け僧侶、神官等の知識階級に依つて一般の教育を掌らしむるべきであると述べて居る。

凡そ學校の設、庠序の教盛なれば則ち人々道の當然なるを知り、其の親を遺し、其の君を後にするものなし、君臣の義明らかなれば、乃ち命ずる所に心服して天下平なり。

と其著書類の卷に述べて居る。これは素行の學校教育論の根本をなすものであつて、素行は廣く國家社會的見地から學校教育を論じ、又は個人の修養上からするも學校教育は必要缺くべからざるものであるとて大いにこれを唱導してゐる。

素行は又女子教育に於ても勝れた見解を持して居たもので、素行の女子教育の主旨は、女子は三従の徳を養ふを以て唯一の心得としなければならぬ、これは單に書物に依る教育では出來ないものであつて、幼少の頃からその母の指導に依り達成することが出来るものであるから母たる者は自らその範を示して子女を導

かねばならない。而して又従來の女子教育は徒らに深窓にのみ閉ぢ籠つて軟文學の書のみを読み、管絃等の娛樂に耽つて居るから自然逸樂にふける様になり、淫らなことに思ひを馳する様な結果を招來するのであつて、これは女子教育上大いに戒むべき點であつて、男女間の姪事を主とした源氏物語や枕草紙等の軟弱なもののみを讀ませることは大いに戒めねばならぬ點であつて、女子にも聖賢の經傳とか烈女の傳記等を讀ませ、健全なる風習を養成せしむるべきであると説いてゐる。

素行は斯くの如く主觀的自然主義の教育説を立て、學校教育の必要を大いに論じ、又女子教育の事に就ても世人の蒙を啓いて教育界に多大の貢獻をしたのであつた。世には素行をして單なる思想家、兵學家としてのみ傳ふる向も多いが、教育家として實際教育に寄與したことは大いに認むべきであつて、徳川時代に於ける有數の教育家と云ふことが出来る。

二、歴史學派の教育説

以上述べ來つた外の學派として専ら國史の研究に努め、大義名分を明らかにして、尊王愛國の精神を高唱したものに歴史學派があり、これを俗に水戸學派とも稱して、明治維新の大業を成すに大なる原動力を與へたものであるが、教育上には特に新しい説を樹てた者は、歴史學派の中には稀れであつた。唯僅かに頼山陽、藤田東湖等を以てこの學派の教育思潮を知ることが出来るが、これと云つても格別組織立つたものではなかつたので、本章に於てはこれ等には觸れないことにし、後節社會教育に於て述べることにした。

三、實學派の教育

實學派とは當時の教育が主として中上流階級の教化を目的として行はれて居るものであつたのを憐らなし

とし、學間に經濟的分野を多分に織り混せて主として農民階級を中心にした社會大衆の教化を目的として唱へられたものであつて、この學派を代表する人に佐藤信淵があり、教育思潮にも亦大いに見るべきものがあるので、以下これに就て述べることにする。

佐藤信淵は出羽の人にして幼少の頃江戸に出で、宇田川玄隨に蘭學を學び、經濟學を井上潜に受けた、これ等の外に天文、地理、動植物、曆、算、測量等の學に至るまでこれを修め、諸國を巡遊して經世濟民の法を説き、又は海防外交等のことに就ても斬新なる説を立てたのであつた。

信淵の學は専ら經濟的根據を深くし、社會の改革を主張するものであつたので、その學を普及せしめ、實績を擧げるには、一般大衆の教育程度を高めなければ到底所期の目的を達成することは出来ないといふ見地から、最も教育の事に留意して居たので、教育説としても甚だ見るべきものが多かつた。

信淵は教育の目的を大體次の如く考へて居た。

凡人民を治むるには、勤て教代を加ふるを緊要とす、何となれば能其心を盡して教るときは驚くべきの妙を發するものなり、古來馬に歩を教へて種々の曲乗を致し、猿に舞を教へて手足運動悉く音律に當らしむ。此等のこと既に奇むべし、抑猫の鼠を捕食する天性なり、然るに猫と鼠を教へて此を同居させ、或は鼠を猫の鼻より頭に上りて舞はしむるに至る、夫禽獸異性なるも、勤て永く此を教ふるときは、不可思議の妙を發すること斯の如し、況や人を以て人を教ふるに於てをや、教の成らざるの理なし。

とて教育することに依つて人間は或る程度まで性質を變ることが出来る、これは禽獸にしてさへ既に前述の如くであつて、人間は一層其の著しいものがある。と云ふのであつて、其の教育の主義として奉ずるところは、

教はよく撰ばずんばあるべからず、甚大切な機要なり、故に此を撰ばんには、欲て天意を推窮するより外に仕方なきものなり、所謂其の天意とは、天地自然に物を生じて、物の自然に熟する如きはなり。故に都雅なる風を野様にし、華奢なる儀を質朴にする法は、大抵天意に叶ふ正法なり。又無爲なる事を繁雜にし、眞率なる人を狡巧にする教は、何れも自然に逆する邪教なり。

と云つて、天意を推窮することを教育の根本義として居る。この天意を推窮すると云ふことは教育には長所もあれば、又短所もある、由て其の選擇を嚴重にしなければならぬが、其の標準とするところは自然の理に叶ふことを以て最上としなければならぬ、これは自然主義に依る教育法を唱導したものであつて、其の根柢をなすものは國家主義を標榜した、農政の樹立であつた。

信淵は更に學校教育に關しても卓見を抱いて居た人であつて、大學校教育論等詳細に涉つて述べて居るが、この中には特別見るべき卓見はないが、教化台を皇都に設けること、し、小學校教育論に就ては大いに見るべきものがある。

教化台とは國家に於ける有用な官吏を養成するのが、其の目的であつて、こゝに入學する者は諸國に於ける小學校中から秀才を選抜して廣く天下の人材を集め、教育しやうとするものであつて、學科目としては、神祇、儀禮、音樂、法律、武備、醫術、天文、數學、地理、通譯等の科目を設け、各々これを専門的に研究せしめて、卒業した者は國家の官吏として採用し、又は各地に於ける小學校の教師として輔佐せしめるもので、更に小學校教育論に就て見るに、

二萬石以上の藩には必ず小學校を建て、其の教師は前述の如く教化台から仰ぎ、以て秩序立つた教育を行はしめ様としたものであつて、教科目としては、酒掃、應對、進退等に涉る禮儀から、四書、近思錄、六經

等を教へしめ様としたものであつて、小學校に於て成績優秀なる者に對しては、教化台及び、大學校等に推薦し、更に修學せしめて適材適所主義に依り國家の役に立て様としたものであつた。又小學校をして一面に於ては社會教育の機關ともして活用せしめ様としたもので、時々村民を集め、君臣父子の義、長幼の序、夫婦の別、朋友の信等に就て人倫の守るべき必要を教へ、政治的な要務をも小學校に依つて辨へさせ様としたものであるが更に小學校の外に廣濟館、療病館、慈育館、遊兒廠、教育所等をも設け以て社會教化の實を擧げ様としたものであつて、それ等に對する趣旨は大要次の如きものであつた。

廣濟館 一萬石以上藩には必ず設けることとし、この館の使命として、貧民の救濟、天災地變に際して人民の救濟を行ひ、其他道路、河川、橋梁等の改修を行ふ等の社會公共の事を掌るを以て其の目的とし、費は全部官費に依ること。

療病館 現行はれて居る無料診療所の如きものであつて、一萬石以上の藩には二ヶ所に設け、醫師と看護人とを置いて行路病者、貧困者共に無料診療を行ふ。

慈育館 一萬石以上の藩には三ヶ所を設け、衣食其他の費用を全部官費を以て支給し、貧民の子弟を收容して、養育してやるのであつて、貧民は幼少な子供を多く抱へて居る時には仕事の防害となり、益々生計が困難になるので、それ等に對しては特に子供を引取り養育してやることを以て、この館の使命とした。

遊戯廠 一萬石以上の藩には二十ヶ所をもこれを設け、子弟の遊び場所とするものであつて、これは現今行はれて居る、托兒所と同一性質のものであつて、其の費用は全部官費支給とすること。

教育所 千石の土地に一ヶ所宛設けることとし、八歳以上の子供の教育を掌らしむるところであつて、此處に於て優秀なる成績を示した者に對しては小學校に進ませ、以て貧困者の勉學を便ならしめ、一方に於て

は村民の老若男女を集めて、これ等に父子、君臣、長幼、夫婦、朋友等の人倫を教へしめる。

これ等は信淵の社會教育に對する施設の研究であつて、當時の時勢からして見ると、實際上には行はれない如き傾向の教育説であるが、はるかに時代を抽んでた所見であつて、これを現今から見ても幾多採るべきものがあり、現今の社會にして漸く實施されつゝある如き傾向のものが、既にこの時代に於て信淵に依り主唱せられて居ることは信淵がはるかに時代を超越した社會教育家であつたことを物語るものであつて、偉とするに足るところである。

尙この外に心學派及び洋學派の教育があるが、これ等は特に教育説として學ぐるに足るべきものを發見することが出来ないで割愛することにしたが、心學派に就ては後節社會教育の項に於て述べることにした。

第十四節 文藝から見た社會教育

一、文藝の興隆

徳川幕府に依る獎學の結果は遂に前古に其の比を見ざる學問の隆盛を來し、文化は遽かに向上し、諸種の文藝は燦爛として起り、これ等新興文藝に依る大衆の教化は大いに其の實を擧ぐるに至つた。徳川時代文藝の特色として各階級に涉つて行はれたことであつて、公卿には公卿としての、下賤のものには下賤のもの、文藝が興り、世會全態を通じて文藝に浸潤しこれ等に依る社會教化の行はれたことは實に偉大なる特色であつて、和歌、俳諧、淨瑠璃等は専ら上下各階級を通じて行はれたものであつた。次にこれ等に關して大要を述べ、以て文藝に依り受けた社會教育の一部分を窺ふことにする。以下論述の便宜上江戸時代を前、中、後

の三期に區分して各期に於て行はれた文藝に就て述べることにした。

二、前期の文藝と教育

1、和歌 この時代に於ける和歌は前代の後を受けて師家に依り教へられる和歌が狭い範圍に行はれるに止つて居た。然るに伊藤仁齋に依つて古學が創稱せられるに及び、和歌にも亦復古的な氣風が漲り、戸田茂睡、下河邊長流等が出づるに於て、漸くこの氣運が熟するに至つたが、後僧契沖の出現に依つて大いに萬葉集の研究が行はれ、和歌も萬葉復活の氣運が著しく醸成せられ、契沖が其の畢生の大事業たる萬葉代匠記を公にするに當つて遽かに萬葉復活の傾向が現はれるに至つた。然し乍ら未だ其の行はれる範圍は上流階級か智識階級の間のみ留まり和歌は廣く一般の間に行はれて民衆教育として効果を擧げるまでには至らなかつた。

2、俳諧 俳諧は江戸時代に興つた文藝中最も大衆化されたものであつて、これに依る大衆の教化が高められた事も著しいものであつた。その起原は遠く上代の和歌に發して居るのであるが、和歌の中特に滑稽卑俗な内容を持つたものが、遂に和歌から分離して連歌として行はれるに至り、江戸時代に及びてこの連歌は遂に俳諧として新しい形の文藝を爲すに至つた。俳諧を創唱した者は山崎宗鑑、荒木田守武の二人であつて、その後松永貞徳が出づるに及び大いに隆盛を來し、遂に俳諧は社會の各階級を風靡するに至つた。貞徳は連歌をして歌道に對する入門とし、俳諧は連歌の初歩的なものなりとて、俳諧をして連歌の方式に依り、複雑な規格を設け、法式に拘泥したので、これを革正しやうとして現はれたのが談林派であつて、談林派は松尾芭蕉の出現に依つて大成し、庶民文藝として極めて廣汎な範圍に俳諧を流行せしめ、これに依る庶民間

の學問の實質が高められたことは著しいものであつた。

松尾芭蕉は世人熟知の如く伊賀の人で、はじめ藤室家に致仕して居たが、主君が天死したので遁世の志を起し、二十三歳にして京都に出で北村秀吟に師事して俳諧に精進し、其の後郷里伊賀に歸つたが再び江戸に出で深川に住して多くの子弟を教育し、俳諧道を世に廣めると共に常に旅に出て、邊土に於ける同志の人々に俳諧道を授け、地方に於ける文化の開發に大なる貢獻をなしたのであつた。

3、假名草子 俳諧よりも更に廣い範圍に行はれ、且つ新興文藝中最も勢力を有し、奈良平安朝に於ける和歌の如く、この時代の各階級を風靡したものは假名草子である。假名草子はその内容とするところは多くは佛書、漢籍又は古文學に見えたところの珍説異聞を平易な假名文に書き改めて娛樂と教訓を目的として作られたものであつて、これが社會に及ぼした影響は實に偉大なものであつた。假名草子の祖と云はれるものは、如儡子の耳笑記であつて、極めて興味ある物語の中に教訓を配したもので、その後鈴木正三の因果物語、二人比丘尼、山岡元鄰の誰が身の上、小さかづき、淺井了意の三井寺物語、浮世物語、犬張子等は大きい喧傳せられたところであつたが、これ等を更に組織立つた、一層興味あるものとして、遂に小説の基礎を造つたのは彼の井原西鶴であつた。

西鶴は大阪の町人として生れた人であつて、西山宗因に師事し俳諧を學んだのであつたが、後小説に走つたのであつて、西鶴が大衆の教化に甚大なる影響を與へたことは俳諧に於ける芭蕉以上のものであつた。西鶴の處女作にして又西鶴の代表作たる好色一代男は大膽にて奇警なる表現と誇張された滑稽味とに依つて全く一世の人心を收斂し、遂に江戸に於ても菱川師宣に依る挿畫を入れ、印刷して廣く世人に喧傳せられたのであつて、其の内容は云ふまでもなく色欲を主題としたものである關係上精神的に一般に與へた影響は尠は

しいものではなかつたがこの本に親しまんとする爲め下屬階級の人々に至るまでも文字勉強をした事は著しいもので學問の普及に與つて力あつたものと云ふことが出来る。

4、淨瑠璃 次にこの時代の新興文藝として重きをなしたものに淨瑠璃がある。淨瑠璃の起原は室町時代に發するものであつて、この時代に牛若丸と淨瑠璃姫との事情を説いた淨瑠璃物語が座頭等に依つて語られはじめたことに始まるものであつて、遂にこれと同様の節にて語るものを總て淨瑠璃と呼ぶに至つた。慶長の頃これに三味線と操人形とを加へて興行する様になつてから漸く民衆娛樂として廣く行はれる様になつたものであつて元和、寛永の頃に現はれた薩摩淨雲が最も有名でその弟子に優れた人々が表はれ、淨瑠璃は一層盛況を示すに至つた。が未だ専門家として權威ある者を出すに至らないで居た時に當つて、偶々巨匠近松門左衛門を出すに當つて淨瑠璃は一躍江戸文學中の華と稱せられるに至つた。

近松門左衛門は西鶴と同様其の傳が詳かでないが、長門と云ひ、或は近江又は京都とも云はれて居る、武士の血を受けて生れ、幼時は寺に入り其の後京都に出で、或公家に仕へたが幾許もなくして辭し、近松門左衛門と名乗つて歌舞伎狂言、淨瑠璃の作者となつた、其の後主として義太夫の爲に筆をとり、百數十篇の戯曲を物したのであつた。

近松の作品は何れも其の材料を事實に取つたものであつて、時代物としては史上の事實を世話物としては當時の出來事を取扱つて居り、傑作として廣く知られて居るものに國姓爺合戦、曾我會稽山、傾城反魂香、關八州緊馬等がある。

又世話物としては曾根崎心中等が最も有名で、これ等は何れも當時市井に起つた情事を取扱つたものであつて、すべて義理と人情とが主題として取扱はれて居る。而してその文章は何れも五七五の韻を踏んで居

て、會根崎心中の道行の文章の如き、當時の文豪として名高かつた萩生徂徠でさへも讃歎久しうしたと云ふことを以て見ても當時の人が如何にこれを熱愛したかと窺はれる。淨瑠璃には前述の如く義理人情を極めて分り易く取扱つたものである關係上、知識程度の低い町人達もこれに依つて受くる影響は實に効果的であつて、平易なる大衆の教化に貢献したことは道學者の説く教訓以上であつた。

この外に當時の人々をひきつけたものに歌舞伎がある。歌舞伎は一世の名優坂田藤十郎の出現に續いて市川團十郎、中村七三郎等の名優が輩出して、漸く盛況を來すに至つたのであるがこれ等は省略することにした。

三、中期の文藝と教育

1、和歌 この時代の文藝は初期の盛況から漸く沈滞の氣の表ははじめた時であつて、何れを見てもこの傾向の濃厚なものがあつた。故に文藝に依る社會教育の實は初期の如く擧げられなかつたが、この時代として特に注意を要することは江戸時代末期の文藝興隆の基礎を形造りつゝあつたことで、換言すれば前期と後期との過渡的時代であつたと云ふことが出来る。而し乍ら和歌に於ては獨りその傾向から脱して初期の不振に引換へ著しく飛躍的なものがあつた、それは契沖に依りはじめられた萬葉集の研究が遂に國學として完全なる發達を遂ぐるに至つて宣長に依りその全盛を見るに至つた。この事は歌道には著しい衝動を興へ、古今、新古今の歌風を脱して萬葉の歌風が作振せられ、田安宗武、村田春海、加藤千蔭、本居宣長等の歌人が出で、非常な活況を呈するに至つた。尙この時代の和歌の特長として、和歌が上流社會の人々に依る趣味的の範圍から抜けて、著しく民衆化されたことで、この意味に於て歌道の隆昌に依る教育の普及も亦相當認め

ることが出来る。

2、俳諧 芭蕉の歿後に於ける俳壇の情勢は、蕉門の人々に各々異つた見解を立つる者が出で、上期の統一された完全なる發展は破られて、此處に一頓挫の情勢を示するに至つた。俳作ら其の後鬼才蕪村の出現に依つて俳壇は幾分の活況を示し、統一が計られたが、歿後は再び沈滞の氣が表はれて來た。故にこの時代としては俳諧に依る教育的收獲は極めて少なかつたのであつたが、唯特筆すべきことは俳文の隆昌を見たことであつて、俳文は蕪村も能くしたところであつたが、この代表的な人は横井也有であつた。也有は尾張藩の重臣であつて古淡的な風格に富んだ俳文を能くし、沈滞に陥つて居た俳壇に一派の清新さを投じたのであつた。要するに俳諧はこの時代は不振に終始したのであつたが、唯注目を要することは俳諧が著しく民衆化されたことであつて、和歌の民衆化にも増して著しくその傾向を示し、遂に俳諧が民衆文藝として壓倒的勢力を占むるに至つた後年の基礎が、既にこの時代に於て形造られて居たことであつて、この意味からする時は俳諧の及ぼした教育的影響も亦大いに認めなければならない。

3、川柳、狂歌、和歌、俳諧等が大衆的傾向を著しく深めた爲めの副産物として遂に變態的な形式を持つた文藝が出現した。それは狂歌、川柳、狂文等であつて、狂歌はその形式は三十一文字に據るものであるが、その内容は和歌とは大いに趣を異にして、専ら滑稽諧謔に重きを置いたものであつて、この時代には和歌をもはるかに凌駕する盛況を示したものであるが、この起原は古く鎌倉時代に端を發して居る。俳作ら文藝として一つの形式を採り、盛んに行はれる様になつのは安永、天明の頃からであつた。

狂歌の代表的作者としては先づ太田蜀山人を擧げることが出来る。蜀山人は名を直次郎と云ひ、寛延二年の生れで、和漢の學に通じて居たが、其の天性は遂に彼をして狂歌の代表的作者たらしめたものであつて、

滑稽味を帯びた中に甚だしく社會を諷刺して、人心に與へた影響は大なるものであつた。蜀山人は又狂文、狂詩の類にも勝れた才能を持つて居り、この方面を代表する第一人者と云ふことが出来る。

狂歌と併行して滑稽、洒落、諷刺等を十七文字の形體に依つて表現したものが即ち川柳であつて、和歌の變態的なものとしての狂歌の如く、川柳は又俳句の變態的なものであつて、俳句は主として自然人事等の具を表現したのに對して川柳は社會、人間のあらゆる缺點を鋭く穿つて表現したもので、狂歌以上に民衆的擴がりを有して廣く社會の風教に寄與するところがあつた。川柳の創始者は柄井川柳と云ふ人で江戸淺草で前句附の宗匠をして居たが、遂に川柳なる新様式の大衆文藝を創稱するに至つたものであつて、川柳は江戸時代の後期に於て最も廣く行はれ、俳句より更に民衆的に行はれたのであつた。併乍ら川柳、狂歌は俳句、和歌等に比して一層民衆的であつたが、これを行ふに深い學問的素養を必要としなかつた關係上、思想的に民衆に寄與することは相當多かつたが、學問上には格別の貢獻は與へなかつた。

4、淨瑠璃 巨匠近松の歿後淨瑠璃にはこれに次ぐ天才が出現せず、漸次衰勢を示すに至したが、僅かに竹田出雲、近松半二等を代表者として見出すことが出来る。

竹田出雲は近松に次いで竹本座に據つた淨瑠璃作者であつて、代表作として假名手本忠臣蔵、義經千本櫻、菅原傳授手習鑑等を擧げることが出来る。文藻に於ては到底近松に及びも付かなかつたのであつたが、唯僅かに結構の上では巧緻をつくし缺陷を補つて居た。

近松半二は出雲の門に出たのであつて明和三年本朝二十四孝を著し、次いで太平記、忠臣講釋、關取千兩職等を著し、代表作としては妹背山婦女庭訓を擧げることが出来る。これ等の作者に依つて書かれた淨瑠璃は何れも歌舞伎狂言として劇に仕組まれたものであるが、近松の作が人々を魅了し盡し、精神的に社會に與

へた影響が絶大であつたのに引替へて、これ等から受けた社會の影響は極めて僅少なものであつた。

5、散文 上方に於て享保元文の頃全盛を極めて居た八文字屋本は次第に衰へて一脈の寂寥を感じさせて居たが、古學の研究が漸く盛んになつて、古語を充分に使驅することが出来る様になつてからは遂に散文界は一新機軸を出すに至り、讀本の出現を見、更に赤本、青本、黄表紙等の小説が一世を風靡し、これ等に依り社會教育上受けたところの影響は實に偉大なるものがあつた。

讀本は繪を主位に置いた小説に對して讀むことを目的とした本であつて、その取材に社會の全面からこれを取入れ、上は王侯から下は庶民賤夫に至るまで巨細漏らさず網羅したものであつて、その結構の雄大な點から見ても正に當時の文藝界の王座に位するものであつた。

讀本の代表的作家としては上田秋成を擧げることが出来るが、秋成は從來の讀本が單に事實を事實として取扱ふに過ぎず、獨創性に乏しい缺點を補つて、事實に巧に神祕的な筆致を織り混せて、從來の讀本を一層生彩あるものとしたのであつた。秋成は通稱を東作と云ひ、餘齋、休西等と號した。國學に對する造詣も深く、本居宣長等とも交友があつた。秋成の代表作は雨月物語であつて、これは全九篇より成り、題材には支那の小説や、今昔物語、日本靈異記等に取つたもので、全篇を通じて怪異、神祕の色彩が豊かである。秋成に依つて端を開かれた散文は遂に江戸時代の後期に至つて、全盛を極むるに至つたものであつて、此の點に於ても秋成の殘した功績は偉大なるものであつた。

洒落本及び黄表紙、洒落本は好色本の艶味から起つたものであつて、賣女の生活と情事を寫したものであつて、野卑、猥雜な點は到底免かれないところである。

黄表紙は繪畫本位の草双紙であつて、青本、赤本、黒本等と共に其の表紙の色彩から來た名稱に外ならな

い。これ等の草子は大阪に八文字屋本の行はれて居た當時から既に行はれて居たものであつて、黄表紙は大牛紙半折の小冊紙で繪を挿んで假名文に依り書かれたものであつた。安永四年戀川春町の金々先生榮華夢が世に出てからは黄表紙の内容が一變し、大人の讀物として廣く持囃されるに至つて、これに依る社會教育への影響は著しいものがあつた。

戀川春町は駿河の藩士で本名を倉橋壽平と云ひ、狂歌、浮世繪にも相當の才能を有して居た著書が三十餘種の多數に上つて居るが、代表作と云はるゝものは、高慢齊行脚日記、鸚鵡返文武二道、花鳥かくれん坊、三幡對紫會我等があるが、中にも文武二道は幕府の文武獎勵を諷刺した際に依り松平定信から叱責を受けたのであつて、この事に依り一層有名となつたものであるが春町はこの爲に沈鬱に陥りその後勝れた作を見せなかつたのであつた。

四、後期の文藝と教育

1、和歌 中期に於て大いに盛になつた和歌の萬葉調復活は後期に於いてもこれを繼承せられ、一層完成せられるに至つた。即ち蘆庵より受けた歌風を更に進めて香川景樹は遂に桂園派なる一派を樹立するに至つた。此處に於て和歌の萬葉調への復活は著しき進展を見せたのであつた。

景樹は鳥取の産であつて、荒井氏と稱して居たが、京都に出で香川景柄の養子となるに及びて香川姓を肩すに至つた。景樹の萬葉調は、『歌は理るものにあらずして調ぶるものなり』と云ふことを根本義として短歌が單に技巧のみ傾くことを戒めたものであつて、これを以て獨自の一派を爲したと見る向もあるが、やはり萬葉調への復活と見るのが正しいであらう。景樹の門下に熊谷直好、木下幸文等があり、歌壇の隆盛にはり萬葉調への復活と見るのが正しいであらう。景樹の門下に熊谷直好、木下幸文等があり、歌壇の隆盛に

力を傾けた爲に短歌は一層盛況を示すに至つた。

桂門以外の歌人として獨自の境地を開いたものに、大隈言道、僧良寛等があり、歌人として歌學者として知らる、平井曙覽等後世に傳へられる歌人が續出し、短歌は著しき發展を見て、民衆の文藝として廣く行はれ、専門的な學問上に廣く社會に與へた影響は甚大なものであつた。

2、俳諧 俳諧は中期頃からその傾向が著しく現はれて居た如くこの時代に及びて著しく民衆化し、初期に於ける芭蕉の如き偉大なる俳人の出現は見なかつたに拘らず、世人の關心は著しく俳諧道に傾けられた如き傾向があつた。

この時代を代表する人物は小林一茶である、一茶は信濃に生れ、幼少の頃江戸に出で、俳句の研究に没頭し遂に芭蕉に次ぐ巨匠として江戸時代の俳壇に重きを爲したのであつた。

3、散文 中期に於て其の萌芽を見た散文界は、この時代に及びて全く黄金時代を現出するに至つた。この時代を代表する人として山本京傳と瀧澤馬琴の二人を擧げることが出来る。

京傳は本名を岩瀬傳藏といひ、愛宕山の東なる京橋に住んで居たところから山本京傳と號したものであつて、黄表紙、洒落本、讀本、合本等に於て其の名を喧傳せられた外、浮世繪、狂歌等にも涉つて勝れた才能を有してゐた。京傳は常に滑稽諷刺を輕快な文章に依つて綴り、名聲を得たのであるが、彼が社會思潮の上で大なる影響を與へたものは、心學早染草と云ふ教訓物の書で、善惡を基礎とした道德觀念を趣向として書き別けたもので、これは極めて程度の低い道德觀念を取扱つたものではあつたが、知識程度の低い下層階級に與へた影響は甚大なものであつた。又この著以來黄表紙の性質を一變せしめた意味からしても特筆に價するものといふことが出来る。

瀧澤馬琴は本名を瀧澤解といひ、通稱倉藏と云つた。明和四年六月江戸に於て武家に生れ、京傳に就て戯作を學んだのであつたが、出藍の譽高く、當時の文壇に大なる反響を投げかけたのであつた。師匠たる京傳が多く遊蕩に身を没して廣く書を読む等のことをしなかつたのに反して馬琴は常に書籍を愛讀し、京傳が洒落本、黄表紙等にその天才を發揮したのに對して馬琴は讀本に主力を傾け、遂に近松と共に江戸時代の二明星と仰がるゝに至つたのであつた。

著書二百二十八種の多きに涉る中に在つて最も勝れて居るものは里見八犬傳であつて、何れも長篇で結構が甚だ大規模である。馬琴はよく當時の道德的理想を人物に依つて巧妙に描出し具體的にこれを讀者に示した。この意味から云ふも眞に當代第一の作家として推稱することが出来るのであつて、而も文章は極めて流麗、散文的詩風を帯びて居た點に文豪たるの風格を具へてゐる。更に又馬琴の偉大なる點はよく時代精神と其の傾向を理解して、これに學殖を織り混ぜ、世人を誘掖したところであつて、彼の存在は江戸文學の最も輝かしき華と云ふことが出来、世道人心に與へた影響も亦絶大なるものであつた。

馬琴が斯くの如く讀本に於てその聲名を恣にしてゐる時に當つて一方に於ては、滑稽本、人情本等が從來の草双紙と共に大に行はれ、散文は遂に空前の盛況を呈するに至つた。

上述の如く讀本、黄表紙、洒落本、人情本等が隆昌を極めて居る時に當つて脚本は久しく沈滞の氣をつゞけて居たが、江戸末期に當つて巨匠河竹默阿彌が出るに當つて一脈の光彩を放つに至つた。

默阿彌は江戸日本橋に於て生れた人であつて文化十三年の出生である。幼少の頃から芝居を好み、小説類を耽讀して居たが、十七歳の時貸本屋に奉公するに及んで脚本の書物を充分に讀むことが出来、嘉永四年三十六歳にしてはじめて脚本に筆を染むる様になつた。

默阿彌は思想も極めて温健で、人情描寫に勝れた才能を持つてをり、三百數十種に及ぶ淨瑠璃、脚本等の著述をして居る。代表作は文久二年に物した村井長庵巧破傘、三人吉三等を擧げることが出来る。默阿彌の取扱つたこれ等のものは、取題は惡に發したものが多く、これ等を何れも最後は純化した善に依つて統一してゐる點は彼の人格の圓滿を物語るものであつてこれ等に依る社會人心に及ぼした影響も亦甚大なものがあつた。

上述の如く江戸時代は學問の復活に依つて各種の學問が盛んになり、それ等の刺戟を受けて文藝も著しき發展を遂げ、古來から傳へられるもの、新興のもの、何れも前古に見ざる活況を示し、これ等に依り直接、間接に世道人心を導き、社會教育の實を擧ぐる爲に文藝が大なる役割を演じたことは特に注目し得るものである。

第十五節 洋學の移入と教育思潮

一、洋學の移入

我國に洋學がはじめて移入されたのは天文十八年基督教が傳へられた時にはじまる。基督教は宗教傳導の目的を以てフランシスコ、サヴィエルの渡來以來、九州各地に於て藩侯保護の下に行はれはじめたのであつたが、完全に基督教の傳導を計るには先づ宣教師をして日本の國情に通ぜしめ、日本語を學ばせると同時に西洋の學問をも日本人に學ばしめ様とする目的から九州の各地をはじめとして安土等にも其の學校を設けたことは既に前章に於て述べたところであつたが、これが洋學の日本に傳へられたはじめであつた。然しながら

ら其の學校設立の目的は眞に洋學を日本に傳へる意味の爲のものではなく、宗教布教の一方便として設けられた學校である關係上洋學を傳へたとは云へ、單にポルトガル語、ラテン語、音樂、修辭學、辯證學、算術等の各部に涉つては居たが、それは單に名目のみで、眞に學問として力を注がれたものは語學と音樂に過ぎなかつた。然るに僅かに開きかけた洋學の扉は豊臣、徳川兩氏の基督教排撃に依り、再び閉ざさるに至つて、唯僅かに蘭學のみが、和蘭人に依つて口述される位の程度に過ぎず、洋學研究の道は幕府の禁書令に依つて全く封鎖されるに至つた。

二、吉宗と書の解禁

洋學は斯くの如く三代將軍家光に依つて發せられた禁書令の爲め研究の道が杜絶し僅かに長崎通事が嚴重なる誓詞を出して蘭語、蘭文を學ぶ程度であつて、日本に於ける洋學の先達と云はれる新井白石の如きですら通事に依つて蘭語を教へられた程度であつて幼稚極まるものであつた。

然るに八代將軍吉宗は廣く學問に興味を持ち大いに奨學すると共に自らもその研究に努め、特に天文曆數に關して興味を寄せ、京都の數學者にして當時天文學に於ける第一人者の稱ありし中根元圭を登用して、文學を學びはじめたのであつたが、元圭は吉宗に奏して、天文學を眞に研究するには西洋の天文學を知らねばならない、然るに我國では禁書令に依つて洋書を入れることが出来ないで到底完全なる天文學の研究は出来ない、と説いたので、是に心を動かされた吉宗は、遂に享保五年切利支丹に關係のなき洋書移入の事を許したのであつた。依つて十一年清の梅文鼎の曆象全書が移入されたのはじめとして、和蘭から天文書の移入を見るに至つたのであつた。

三、蘭學と青木昆陽

天文學に關する書が和蘭から移入せられたが、それは何れも原書であつた爲め、其の文字を解することが出来なかつたので、吉宗は平素から青木昆陽、野呂元丈が蘭語の素養あることを知り、昆陽に蘭語研究の許可を出し、兩名に命じてその天文書を讀ましたのであつた。

昆陽は江戸日本橋に生れ、はじめ京都に上り伊藤東涯に教を受け、制度、經濟、本草等の實用の學を收めたのであつたが、その後江戸に歸り、八丁堀に於て子弟の教授を掌つて居たが、偶々加藤直枝の推舉に依り、幕府の御書物御用、御寫物御用を承はり書庫出仕を許されたのであつた。其の後御書物奉行として祿百五十俵を賜はつたのであつたが、昆陽が蘭學に志を寄せはじめた原因は、嘗て幕府の書庫に於て蘭書を見たことに端を發するものであつて、元文五年公然と吉宗より蘭學研究の許を受くるに及びて其の宿望を達成したのであつた。

昆陽はこの後専ら蘭人に就て和蘭語を學び、遂に寛保二年には和蘭貨幣考なる書を著し、翌三年には和蘭和譯を著した。昆陽はこの當時から燃ゆる如き蘭學研究の志を抱いて營々と勉學に努めて居たのであつたが、江戸に於ては良師を得ることが出来ないで、延享の頃遂に暇を乞ふて長崎に至り、専心和蘭語の研究に努め、漸く蘭語の性質を解するに至つたのであつた。以後昆陽は専心著述に努め、和蘭文字略考、和蘭文譯等の書を著し、和蘭の言語、文字等に對して研究の道を開いたのであつた。

四、蘭學の流行

昆陽に依つて端を開かれた和蘭語の研究は其の後一つの流行となり、多くの蘭學者を輩出せしめたのであ

つたが、先づ昆陽の研究を繼承して、蘭語を研究し遂に蘭書翻譯の域にまで至らしめたのは前野澤良澤であつた。良澤は豊前中津の藩醫であつたが、偶々蘭書の殘篇を見てから蘭學に心を寄せ、昆陽に就て蘭語を學び、昆陽の歿後長崎に至つて専心蘭學の研究に努めたのであつた。

これと殆んど同時に若狭の人、杉田玄白も蘭學に志し、醫書の翻譯を思ひ立ち良澤と心を合せて蘭學の研究に力を傾けたのであつた。斯くて知友を得た良澤は協力して蘭書の翻譯に努め心苦の後遂に解體新書の翻譯を成し遂げたのであつた。

解體新書の翻譯に如何に苦心を重ねたかと云ふことは蘭學事始中の文を以ても充分に窺へる『譬へば眉と云ふものは目の上に生じたる毛なりとあるやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日には明らかめられず、日暮る迄考へつめ、互ににらみ合せて、僅かに一二寸の文章一行も解し得ることならぬ』とか又は『其頃ウオールデンブック對譯辭書といふものもなし、やうやく長崎より良澤求め歸りし小冊子ありしを見合たるに、フルヘツヘッドの譯註の木の枝を断ちたる其述フルヘツヘッドをなむ、又庭を掃除すれば其塵土聚りフルヘツヘッドすと云ふ様によみ出せり、これは如何なる意味なるべしと又例の如くこじつけ合ふに辨へ兼ねたり、時に翁(玄白)思ふに木の枝を断ちたる跡癒れば堆高くなり、又掃除して塵土聚ればこれもうづたかくなるなり、鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、フルヘツヘッドは堆と云ふことなるべし、然ればこの語は堆と譯さば正面すべしと決定せり。其時のうれしさ、何にたとへんかたもなく、連城の玉をも得し心地せり』等の文章に依つて察しられる如く今日の學術よりして見る時は想像も及ばない程の苦心を重ねて完成したものであつて、これに日子を費すこと正に四年、稿を改むること、十一度に及び、遂に安永三年八月にこれを完成することが出来たのである。これが我國に於ける蘭書翻譯の嚆矢をなすものであつた。この蘭書翻譯の

完成は洋學の發展に大いに寄與するところがあり、我國の洋學史上に一區劃を出したのと云ふことが出来る。

良澤はこの翻譯を完成するに當つて蘭學に大なる自信を得、其の後も蘭學の研究に一意専心力を傾け、遂に十數種に渉る蘭學の著書を發表するに至つたのであつて、昆陽と同じく我國の蘭學史上を飾るに足る人である。

杉田玄白も蘭書翻譯のことに與つてから後は一意醫學の研究に没頭し、遂に蘭方醫術の大家として従来の漢方醫を改めて蘭學の學を廣め、日本の醫術界に一つの革命を興へたのであつたこれから蘭學研究の傾向が一般に廣められ、蘭書を読み、はるかに進歩した西洋の文明器具を珍重するの風が起つて來たが、これ等の社會風潮に依つて生み出された逸材は平賀源内大槻玄澤であつた。平賀源内は讃岐の人で、松平氏に仕へて居たが蘭學に大なる興味を寄せ、遂に長崎に赴いて、和蘭人と交はり、本草窮理の新知識を得て、江戸に出で、火洗布を作り、この外に寒暖計、電氣機械、陶器等の文化器具を製出して社會を裨益したのであつた。

大槻玄澤仙臺の藩醫として生れたのであるが世の蘭學愛好の風潮に刺戟を受け早くから蘭學の研究に努め、江戸に於て玄白、良澤等から教を受け、更に長崎に出て専心蘭學の研鑽に資し大いに名聲を博したるのであつた。其の後江戸に於て芝蘭堂を開き子弟を教へ我國に於ける洋學の塾として主として語學の研究に努めた。玄澤には語學、醫學、本草、國防等に對する著書が多く、これ等の書を木版刷として廣く天下に行はせられたことは蘭學の隆盛に非常な効果を收め得た、玄澤には又多數有名な門人が輩出して居り、宇田川玄隨、橋本宗吉、安岡玄眞、山村昌永、稻村三伯等は廣く知られた蘭學者であつた。

五、對譯辭書の出版

玄澤の門にその教を受けた三伯は其の後長崎に遊學して、フランス、ハルマの蘭學辭書から蘭語八萬餘言を取つて寛政八年に木版印刷に依り出版して蘭學愛好の士に分與したのであつて、これが我國に於ける對譯辭書の嚆矢であつた。三伯はその後京都で蘭學を講じて居たが、偶々彼の門に教を受けた藤林普山は師三伯の遺志を繼承して、對譯辭書中から更に三萬餘言を抜いてそれに更に醫學に必要な言葉のみ二千七百語を追加して文化七年に印刷した。又一方に於ては和蘭商館長として長崎に居た商人ヘンドリック、ゾーフは幕府の命を受けて、普山と同様三伯の對譯辭書に依つて更に完全な對譯辭書を作つて世に公にしたので、此處に於て蘭學は非常な勢を以て研究されるに至つた。始め三伯に依つて作られた對譯辭書は三伯はこれを東西韻會と稱したが一般にはハルマ和解、又は江戸ハルマと稱せられて居たもので、蘭人ヘンドリック、ゾーフに依つて作られたものは道富ハルマと呼ばれ、後安政年間に和蘭字彙と名付けられるに至つた。斯くの如く蘭語の對譯辭書が刊行せられたことは、蘭學をして一層隆盛に向はせる結果となり、遂に幕府に於ても翻譯局を新設するに至らしめたのであつた。

六、洋學所の設

上述の如く蘭學が非常な勢を以て隆昌に向つて來たので幕府に於ても時勢が既に蘭學をはじめ西洋諸國の學問を取入れることの必要に迫られて居ることを知り、文化八年には天文臺中に著書和解所を設け、大槻玄澤、宇田川玄眞等をして洋書の研究に當らしめた。其の後ペリーの渡來があり、大勢は洋學の研究を餘儀なくせしめたので、遂に安政二年には九段坂下に洋學所を設くるに至つた。更に萬延元年にはこれを小川町に

移し、英、佛等の學問をも加へて廣く研究せしめる事にした。文久元年には遂に諸藩の子弟に於ても希望の者があればこれに入學を許し洋學の門戸を開放するに至つたのであつた。

七、其他の洋學

幕末となつて諸外國との交通が漸次開け、ペリーの來航以來、遽かに洋學研究の必要を感じ幕府は文化六年遂に長崎の通詞に命じて英語の研究を行はしめた、又當時露西亞との交通も漸く頻繁となつたので英語と同様露西亞語の研究も必要とせられ、同年同じく長崎の通詞に命じて露語をも學ばするに至つた。

斯くの如く幕府の注意が一度諸外國の學問に注がるゝや、從來の認識が大局に於て誤謬せることに氣が付き、從來蘭學研究を以て西洋文化の移入に事足れりとして居たが、此處に至つて蘭學は實用に適しない事を知り、一般も亦蘭學崇拜から歩を轉じて洋學に主力を傾くる如き氣運を表はし、遂に福澤諭吉の提唱に依つて洋學は漸く重視せられるに至つた。

又偶然の機會に村上英俊に依つて佛蘭西の化學書も傳へられ、これを期として佛語の研究も行はれるに至り、安政末年に至つては幕府の命に依り佛蘭西語の研究も洋學所に於て行はれるに至つたのであつた。

この外に醫學と密接な關係を持つて居る本草學は理化學及び植物學として移入せられたのであつて、物理學は當時費西家又は理學と稱せられ、江戸の人青地林宗が文政十年に氣海觀瀾を著はしたのにその端を發せられて居り、化學は舍密家と呼ばれ、宇田川玄眞の子榕庵が天保八年舍開宗を著したに初まつて居る。榕庵は又西說普多尼訶經と云ふ植物書を翻譯し、この外にも植學啓原をも著はした。以上の外に植物學に功勞があつたのは飯沼欲齋と伊藤圭介の二人で欲齋は玄眞を學んだ後専ら植物の採集に努め安政二年には草木圖說

を著し、我國に於ける植物學の基礎を開いたのである。

八、教育思潮の對立

斯くの如く蘭學が盛況を示し、更に安政年間に至つては英佛等の學問をも取入れることになつたので、此處に必然的に起つたのは教育界に於ける新舊思潮の對立であつた。幕府に於ても斯くの如く蘭學をはじめ其他の洋學に獎勵的な傾向をさへ示し、安政二年には九段坂下に洋學所をさへ設くるに至つたので、從來幕府の官學として異學の禁をさへ設けしめ獨りその保護を受け來つたところの林家を代表する朱子學派は、幕府の洋學獎勵を甚だ遺憾とし、遂に林家から幕府に抗議を提出して洋學所の撤廢を迫つたのであつた。斯くの如く從來、儒學と國學とに依つて進歩を見せて來た學界は洋學の移入に依つて内的に著しく複雑化され、遂に新舊兩思潮の對立を見るに至つたのであつたが、この對立は結果に於て大なる効果を與へ、遂に明治維新となつて新思潮の勝利に歸し、爾來洋學は急速なる發展を見するに至つたのである。

第十六節 家庭と教育

一、家庭生活の概況

江戸時代に於ける家庭生活は前後三百年を通じて格別の變化を見ることが出來ず、殆んど現今と同様の生活様式に依り家庭が營まれて居たものであつて、既にこの時代となつては上代の遺風は完全に一掃せられて男子を中心として家庭生活が營まれたのであり、一家の中樞を爲すものは主婦でなくして男子であつた。

二、子供の教育法

子供の養育に對する風習も上代のそれとは大いに趣を異にしたもので、現今に著しく近い習慣が行はれて居た様である。上流階級に於ては子供の出生に當り特に産屋を設けて居たが中流以下の者は初産の時に限つて實家に歸り分娩する風習が行はれて居た。これ等もそのまゝ現代に繼承して居るのであつて、多く江戸時代の生活様式はそのまゝ現今に傳へられて居る。この外子供を生育させる爲の儀式等は大同小異で上代並に現代と大差は認められないのでこれ等は述べぬことにしたが、此處に注目を要することはこの時代の中期以後に於ける子供の養育が著しく理論的になつて來たことで、これは上代のそれと著しく傾向を異にして居るところである。斯くの如く子供の養育に理論が尙ばれるに至つたことは、一に學問の隆盛に依り醫學の進歩を見た等のことに依るものであつて、特に後期に於けるそれは著しく醫學的に傾いて居た。以て醫學の發達普及に依る衛生思想の充實を知ることが出来る。貝原益軒の養生訓の如き、又益軒に依つて胎教が獎勵された如き當時の儒者に於ても是等の點には相當意を傾けて居たことが窺はれる。更に興味ある事は醫者が胎教を大いに獎勵して居ることであつて、元祿時代に於ける名醫として其の聲が高かつた、稻生恒軒は次の如きことを述べて居る。

人は教に依らざればよき人とならず、その教、幼少の時にあるをよしとす、たゞ幼少の時のみならず、胎内にある時より教あり、いまだ生れも生でざる子に教ありとはいかに、それ人の子胎内にありては母と一氣なり。母の心の様を子の心にうつし、母の身の働を子の身にうつす。されば懐胎のうち母の心よこしまなく、すなほなれば生るゝ子の心も正し。母の身の働あしき事なれば生るゝ子、年に隨ひて行儀よし。

等として胎教の必要を説いて居る。

この時代に於ける子供の教育法なるものは、上代と比較して、著しく個性の尊重と云ふことが重視せられて居た様で、厳格に子供の行動を律する等のことは奨励されなかつたものゝ如くである。それは益軒の和侶童子訓に次の如きことが見えて居ることに依つても略々察することが出来る。

小兒の時紙鳶をあげ破魔弓を射、狛をまはし、毬打の玉を打ち、てまりをつき、端午に旗人形を立つる、女兒の羽子をつき、天兒をいだき、雛をもてあそぶの類はたゞ幼き時好めるはかなき戯にて、年漸く長じて後は必ず捨るものなれば、心術に於て害なし、大やう其好に任すべし。されど費多く、かざり廻し好み過さば戒むべし。

等と述べて居る。これは遊戯に關してのことであるが、これに依つても窺はれる如く、子供の教育と云ふことは多くその個性に基いて行ふことが、尊ばれて居たものであつて、上代の如く上流階級になる程その教育を厳格にすると云ふ如き風習はあまり行はれなかつたものゝ如くである。

三、公家の家庭教育

江戸時代に於ける公家は、戦國時代の公家の如く衰微の極に達しては居なかつたが、上代の平安朝の如き隆昌は見られなかつたところで、はじめ家康が江戸開府の頭初は公家の勢力も稍復活の情態を示して居たが、徳川幕府の基礎が漸く定り、政治が悉く幕府の専權に依つて行はれる様になつてからは公家の勢力も再び衰微を見るに至り、江戸時代後期に於ける公家は全く衰微を來して居た。故に上代の如くこれ等の階級が率先して學問の中軸をなし、新傾向を醸成すると云ふ如き事は全く行はれず、僅かに公家としての生活に必

要な程度の教育をするに云ふが如き有様であつて、その勢力は著しく衰微して居たのであつた。

斯くの如く公家の存在なるものが非常に消極的なものとなつて居た關係上、江戸時代上下三百年を通じて公家の家庭教育の如きも甚だしい變化を見ることが出来なかつた。

公家の家庭教育中最も重視されて居たものは朝儀に關する有職故實であつて、其の他詩歌、漢文、音面曲聯句、書等の範圍に涉つて教育が行はれて居たものであつて、其の教育法は家庭に於て父母等から授けられるもの、又は一定の師に就てこれを學ぶ者等があつたが、公家の家庭教育なるものは著しく古典的で、江戸時代の新傾向を示した學問とは非常に趣を異にするものであつた。それは公家の學問は主として父祖傳來の學か、又は父祖累代の學を以て世に立つ家學の教育を受けたことに依るものであつて、これ等専門教育の風習として完全に一家一學を以て立ち、父はその學を子に傳へ、更に子はこれをその子に傳ゆると云つた風のものであつて例へば歌を以て立つものは歌以外の漢詩等の分野に入ることを避け、書を以て立つものは書以外の範圍に入ることを避けると云ふ如き風習となつて居たので、その家庭教育も著しく専門的傾向を帯びて居たものであつた。故に公家の教育なるものは、時代の推移を考慮して、如何なる方法に依り、又如何なる學問を行ふことが最も理想的であるかと云ふ如き事は等閑に附され唯公家としての日常生活に必要な學問を、上代から繼承した習慣に依つて上代そのまゝの教育を受けたものであつて、これ等の點が、遂に公家を以て知識階級の第一線から落伍せしめた原因と云ふことが出来る。

四、禁裏の御奨學と公家の智育

上述の如く江戸時代を通じて公家の教育は不振に終始したと云ふことが出来るが、此處に特筆して置き度

いことは、この時代の初期に於て禁裏の御奨學が公家の家庭教育としての智育を著しく啓發せしめたことであつて、江戸時代中期以後は禁裏も學問の事に力を注ぐ餘力が乏しかつたので自然衰微の情態であつたが、初斯に於ては信長に次ぐに秀吉の禁裏尊崇に次いで家康も大いに意を禁裏に及ぼし、南北朝以來夙に衰微を來して居た禁裏の御學問の事に關しては痛く心を傾け、禁中御條目等にも見えて居る如く禁裏の學問を隆盛に導く事にひたすら力を傾けた爲め、當時禁裏の學問は極めて隆盛を見るに至つた。土御門泰重卿に依つて記された學問の情況を見るに極めて秩序整然たるものがある。即ち元和五年正月二十八日の條に、

御攝家方、九條殿、近衛殿、一條御參内、各稽古之書立目録、二日、有職、六日歌、十日儒學、十三日樂部曲、十九日連歌、二十三日詩文學、二十五日歌學、二十七日連句、二十九日詩能書、毎月式日、無懈怠之様に、急度御兩天奏仰候、九色之内は二色三色、人々次第御請申、則名乗加也、予詩聯、倉橋聯句也、とあり、更に同書元和七年四月の條にも次の如く見えて居る。

愚詠十歌廿首清書仕、中院殿へ遺候、夏中は百首日課也、從二日一刻三十日相きり清書依定也。等と見えて居るのを以て、大いに組織立つて御學問を行はせられて居たことが分り、これ等と直接影響として公家の智育も著しく重視せられて居たもので、引用の文章に見えて居る如く歌を日課として學ぶ程に力を傾けて居たものであつた。これ等は主として慶長の頃から寛永の頃に至る間であつて、この間は禁中の御學問も延いては公家の學問も著しく隆盛を示して居た。

五、公家の實踐教育

公家の知的陶冶は上述の如く公家自身の安住的退嬰思想に依つて再び不振に陥り、遂に上代の如く公家が

文化の源泉として重きを爲すことを得なくなつたのであるが、この外に大なる原因と見ることの出来るのは幕府の公家に對する有形無形の掣肘である。幕府は自らの基礎を不動のものとする爲に一般將士にも甚だしき掣肘を加へた如く、公家にも亦有形無形の掣肘を加へて來たのであつて、これ等に依り公家の教育が不振を來してことは否み難い事實である。斯くの如く公家の知的陶冶は一般の盛況に比して不振を極めて居たが、實踐教育に關しては相當に見るべきものがあつた。これは上代の公家なるものは禁裏の保護に隠れて、自らの階級に對する認識等も全く行はれて居なかつたものゝ如くであるが、戰國時代の波瀾を受けて公家が漸く自らの存在を強く認識する様になり、延いては祖先に對する崇敬の念を強め、家名の發揚と云ふ如きことも著しく公家階級の腦裡を支配する様なつた。故にこれ等を實際に移す爲の家庭教育が上代に比して著しく行はれはじめたことであつて、特に品性の陶冶と云ふことに關しては最も意を傾けたところであつた。これ等の傾向は公家が全盛を極めて、社會の指導的位置にあつた上代は等閑に附されて居たもので、江戸時代から著しく留意されはじめたことは注目に價することゝ云へるであらう。

六、武家の家庭教育

江戸時代に於ける武士の家庭に於ける教育は智的陶冶の方面に於しは前代に見ることの出来なかつた盛況を示したのであつて、特に中期以後に於て其の著しきものがある。江戸時代は天下がよく治り外敵に對する武備も中期以前に於ては全く考慮に入れられなかつた如き情態であつたので、武士は自然に武技よりも文を重んずる傾向が甚だしくなり、又一には徳川幕府の奨學が一般にその影響を及ぼして武士階級は著しく學問を重んずる様になつた。故にその家庭に於ける教育も舊來の實踐教育よりも智育の方が尊里せられる如き傾

向が多かつたが、武士の家庭教育は公家のその如く、一定の形式に依つて行はれたものではなく、階級に依つて著しき差異を認めることが出来る。即ち將軍家の家庭教育と、藩侯のそれと、一般武士のそれとは其處に著しき相異があつたので、到底公家に於ける家庭教育の如く一律にこれを述ぶることは出来ないが此處では便宜上これを二つに分つことにした。即ち將軍家及び藩侯のそれと、一般武士の家庭に於ける教育とである。

1、將軍家に於ける家庭教育 將軍家康は武を以て天下を取りこれを治むるには文を以てせんと開府に當り先づ文教奨励の舉に出たのであつた。徳川氏代々の將軍はよく家康の遺志を繼承して文教を奨励したので、將軍家に於ける家庭教育の如きも嚴重に、しかも綿密なる注意を以て行はれたものであつた。それは單に知的陶冶に於てのみではなく、行住座臥の事に致るまで注意して教育が行はれたものであつて、先づ出生するや乳母を定めて養育の主婦とし、この外に傳相又は輔佐を置いて教育の主任として居たもので、乳母は幼児の日常生活に對する習慣上の教育を掌る關係上その人選には最も嚴重を極めたものであつて、單に哺乳期の短かい間を仕ゆると云ふ如きことでなくして、元服して一人前となる間は常に身邊に仕へて教育の事に當つて居た。これ等將軍の養育者として如何に優秀な人材が選ばれて居たかと云ふことは、二代將軍秀忠の傳相として青山忠成、内藤彌三郎、大久保忠鄰等の如き人々が選ばれて居り、更に輔佐として酒井忠世を選んだ如き、又三代將軍家光の乳母として烈婦春日局あり輔佐の任を帯びた者に酒井忠世、土井利勝、青山忠俊、酒井忠利、内藤清次郎等何れも當時一流の人物を以て任じて居ることを以て見ても、其の家庭教育が如何に嚴重に、而して綿密に行はれて居たかと云ふことを知ることが出来る。これは單に上代の將軍二三に於てのみ行はれた事ではなくして、歴代將軍の家庭教育は最も慎重に行はれたものであつた。それは歴代將軍

の傳相、輔佐等の役に何れも當代一流の人物を以てして居ることに依り窺はれるところであつて、参考に重なるものを掲げて見ると、家綱に對して、井伊直孝、酒井忠勝、松平信綱、阿部忠秋、大久保忠正等の如き俊英あり。家繼に對して、井伊掃部、松平正容、家重に對して、井伊直惟、松平正容、家治に對して、松平乘昌、酒井忠和、家齋に對して、井伊直幸、松平容領、家慶に對して、加納久用、加納久敬、曾我助道、松平寛碩、家定には井伊直亮、松平容敬、等がある。斯くの如く傳相又は輔佐の役に任ぜられた者は何れも徳川氏譜代の臣の中で一流の人々を以てして居ること依り、家庭教育を重視した一斑を窺ふことが出来る。徳川氏が歴代の將軍に何れも相當な偉材を養成して居り、中には後世の勳鑑として範を垂れた人々もあり、これ等は全くその家庭教育に於て嚴格を極めた事に依るものであつて、公家に於ける家庭教育は單に専門の學藝を傳ゆることにのみ傾注されて居たと比較し雲泥の差と云ふことが出来、特に秀忠、家光、家齋の家庭教育は家庭教育中の範として推すことが出来る。

2、藩侯の家庭教育 藩侯の家庭教育も亦上將軍家のそれに倣つて相當嚴格に行はれたものゝ如くであつて、徳川光圀、保科正之、池田光政、細川重啓、上杉治憲、松平定信、島津齋彬、前田綱紀等に於ける家庭教育は最も嚴格に行はれたものである。其の他諸藩に於ても何れも幕府の教育方針を受け傳へて、乳母、傳相、輔佐等の役に類するものを置き専ら家庭に於ける教育を重視したのであつて、將軍家に於ける家庭教育の規模を縮少した家庭教育が行はれて居たものゝ如くである。

而してこれ等家庭教育に於ける智育の標準として經學、歴史、漢史、和歌等のものが授けられて居り、武術、禮法、軍學、佛書、家訓等の教育も行はれ、五常の精神を涵養することが最も奨励されたのであつて、剛勇、廉潔、節操、慈悲、禮讓、忍耐等の諸般に涉り、理論と實際の兩方面から人格を陶冶することが、こ

れ等の階級に於ける家庭教育の主要なる目的とせられて居た。

3、武士の家庭教育 江戸時代に於ける一般武士の家庭教育は、前述の將軍家に於ける又は藩侯の家庭に於ける教育を縮小したものであつて、其の規模こそ狭少簡易であるが、家庭教育を行ふ根本精神は前者と趣を同じうするところである。而乍ら前者は主として治者であるのに反して後者は被治者である關係上教育の根本精神に於ては同一なる事も方法に於ては趣を異にもるところが多かつた。この點前者の教育が智育に重きを置かれ、徳を具へる事に力を傾けて居たのに對して後者の一般武士に於ては忠勤の氣性を尙ぶ實踐教育が重く見られたところである。又智育に於ても大體の傾向は藩侯、將軍のそれと同じく經書を主とする徳の完成と云ふ事が主要目的とされて居たところである。

この時代の武家に於ける家庭教育を上代の武士階級の家庭に於ける教育と比較すると著しき差異を認めることが出来る。上代の家庭教育に於て中心とされて居たものは智育よりも實踐教育で、武士は専ら戰場に臨んで有用の材たるべき教育を受けて居たものであるが、江戸時代の家庭教育は上下を通じて實踐教育よりも智育の方に重きを置いて居たことは時代の趨勢の然らしむるところであつて、大いに注目し價するものである。

4、庶民の家庭教育 江戸時代の家庭教育中特筆に價することは中期以後から家庭教育が庶民間に於ても行はれはじめた事である。これは江戸時代の最も特色とするところであつて、上代の庶民階級は教育に關しては甚だ冷淡で、比較的文化が庶民間に及ぼして來た室町時代の後期に於てさへ、一般庶民の教育的關心は極めて稀薄なものであつた。増してそれ以前の時代に於ては、庶民は全く禽獸と異るところなき程度の存在をしか認められて居なかつたもので、教育の如も全く無關心の情態であつたが、江戸時代に至つて文化が著

しく庶民間に浸潤して來るにつれて庶民階級の教育的關心は著しく高められ、庶民教育機關として寺子屋の發生があり、農、工、商等の下層階級の文化は大いに高められるに至つた。庶民間の文化が高められ、これ等の階級の生活様式が文化的になつてくるにつれて、活動の様式も文化的傾向を多分に帯びて來、それ等を最も必要とする商人等に於て自家の信用を益々高め、家名を發現すること必要な酒掃應對や主従間の禮儀作法等に涉る家庭教育が奨励されて居たもので、この時代の大町人の間に武家と同様子孫を戒むる家訓、又は家惠が作られて居た事は當時町人の家庭教育を知る唯一の参考となるものである。併乍らその家庭教育の内容は知的陶冶よりも家業を中心とした實用方面の教育が重きを爲して居たことは容易に察しられるところである。兎も角社會の支配權が武士階級に依つて握られて居て、文化の中心は武家に存し、武家の盛衰が直接社會に重大なる影響を與へて居た上代の社會組織が庶民間の教育程度の向上に伴ひ實質を漸次具へて來た結果に依り漸く社會の進向がこれ等の庶民階級の動向を多分に含む様になつた結果として、庶民階級に於ても家庭教育の如きものが行はれるに至つたもので、江戸時代の中期頃から漸次これ等の庶民階級を對照とした往來物や其他平易なる教訓書の著はされたことに依つて庶民階級の家庭教育が向上して、知的陶冶の部分も漸次取入られる様になつたのであつた。

第十七節 女子教育

一、女性の家庭的地位

江戸時代には女性の社會的地位が著しく低下して來た。従つて家庭に於ける女性の位置も亦これと同様甚

だしく低下して来てひたすら三従の徳を守ることを以て女性の本領とした。これは上代の如く女性が一家の中心として男子をその家に迎へて家庭生活を営む如き風習が全く廢絶してこの時代から女性は反對に男性の家に貫はれてゆく様になつた關係上、女性は絶對的に男性に服従するものと云ふ事に基礎付けられた道德觀念に支配される様になつて儒教思想に基く七去、三従、四行、五病の思想に依つて女子の道德が出来上つて居たことに依るものであつて女性に服従的教育法が行はれるに至つた。

故に女子を育てるには先づ他家に嫁すものであるから男子よりはるかに従順に育てると云ふことが通有の女子教育觀となつて居た様である。當時の女子觀を最もよく證明する物語として次の如きことがある。慶長の頃江戸に助四郎と云ふ者があつたが、度々夫婦喧嘩をした末には必ず妻に家を出ることを命じて居た。併しその妻は三人の子を抱へて居り、夫の命に従ふことが出来ず、斯かる間に度々夫婦喧嘩が繰返されて居たが、或時その妻が夫の不法を人に訴へたところ、その人は女は七去と云ふことがあり、儒教にも明らかにこの事を教へて居るので夫の氣に入らざるものは離別することは少しの差支もないことである。夫の命に従つて女が家を出ないことは道を全うせぬ者である、と教へたのであつた。で女は仕方なく遂に町の代官所に訴へて自分は二十年間も現在の夫と連添ふて三人の子供さへあるのに、私を離縁しやうと云ひます、何卒召出して御説諭の程を願ひますと訴へたのに對して、代官は、女が男に従ふのはあたかも若草が風のまにまに靡く様なものである、書物にも女は三従とて一家を持つことが出来ない、即ち幼少の頃はその親に従ひ、中年に於ては男子に従ひ、老年となつてはその子に従ふべきである。とて却つてその女性を戒めたと云ふ事がある。斯くの如く當時社會の一般的女性觀として片務的服従を強ひて居たのである。故に女子教育の目的としては専ら三従の徳を教へることに重きを置いて知的陶冶等は等閑に附され勝であつた。

女性の社會的家庭的、位置が斯くの如く低下して來ると自然社會的に又家庭的に優秀な位置にある男子の玩弄物の如き傾向を示すに至り、男子を喜ばせる爲の音楽とか其他の技能が女性必修のものとなつて來た。

二、上流社會の女子教育

以上述べたところは主として中流以下の階級に於ける女子教育の概要であるが、上流社會に於ける女子教育にはこれと幾分趣を異にして居るところがあつた。この時代の「上流階級の女子」には、徳川幕府の政略に依り幾多嚴格なる制度が設けられ、女子の自由を束縛して居た。斯くの如く女子に對して特に制度等を設けながらも一面に於て女子の品性を陶冶し、智育を向上せしめる如き事に關しては極めて冷淡であつて、幕府の制度に依る女子の修養機關等は全く設けられて居なかつた。故に女子の教育は其の家庭に於て行ふ以外知的向上は計られなかつたのであつた。當時家庭に於て女子が如何なるものに依り知的陶冶が行はれて居たかと云ふに、讀物としては往來物、女四書、女誠、女實語教、女孝經、烈女傳、女四書、藝文圖會、女重寶記、女文台綾囊、女今川等のものを部分的に教へられるに過ぎなかつた。

これ等の教育法としては各家庭に於て各々師傳について教を受けたものであつて、この外に藝道として、和歌、女禮、彈琴、茶の湯、活花等の諸藝を學んだ、これ等の諸藝も各々師匠を家に招いて其の教を受けることが最も多く行はれ、中流以下の家庭に於ては師匠の家に向いて教を受ける者が多かつた。上流階級に於ても女子の藝道は重んぜられたところで、これ等の諸藝に關する教育は知的陶冶から見ると大いに力を傾けられて居たところであつて、藝道に勝れて居ると否とはその女性を價値付ける大なる要素とされて居た。併乍らこれは當時の社會狀態の極めて一般的なる觀察であつて、この時代は上代に比してはるかに文教の

普遍向上した時代である關係上、それ等に刺戟されて大いに學問に精勵した二三の異例的女性をも發見することが出来る。それは北村秀吟の弟子田捨女の如き、貝原益軒の妻東軒の如き、伊勢祠宮度會氏の女、智鏡尼の如き、三田宗壽の妻、井上通女の如き、縣居の門に於ける三才媛の如き、擧げれば相當の數に達するのであるが、これ等の女性が平安朝に於ける女性の活躍の如く華々しく傳へられて居ないのは、當時の社會に於ける女子觀が平安朝時代に於ける女子觀と大いに趣を異にし、社會が女性の活躍に對して何等の興味をも惹かなかつたことに依るものであつて、この時代の女性が悉く退嬰的な者計りであつたと云ふことは當を失した見解である。

三、下層階級に於ける知的陶冶

當時下層階級に於ける女子教育は専ら遊藝の事に力を傾けられて居たもので、これを如實に物語るものとして浮世風呂に次の如き文章の見えて居る。

朝むつくり起きると、手習のお師匠さんへ行つて、お座を出して来て、夫から三味線のお師匠さんのところへ朝稽古に參つてね、内へかへつて朝飯をたべて、踊の稽古から手習へ廻つて、お八つに下つてから湯へ行つて參ると、直ぐにお琴のお師匠さんへ行つて、夫から歸つて三味線や踊のおさらひさ、其内に、らいつとばかり遊んでね、日が暮れると又琴のおさらひさ、夫だから、さつぱり遊ぶ隙がないから、否でいやでならないはな。

と云ふのががあるが、この文章が當時の下層階級に於ける女子の動勢を如實に物語るものであつて、斯くの如く遊藝が最も重きを置かれて居たところであつた。

併乍ら智育の教育も全然没却されて居たのではなく、後期以後に於ては女子を寺子屋に通せる如き事も相當廣く行はれて居た様である。女子の寺子屋に於ける教育も男子のそれに比較すると殆んど問題にならぬ程度に低かつたもので、江戸末期に於てさへ女子を寺子屋に通はせることの主要目的は手習を覚えさせることに在つた。その他の知的教育は當時の社會に於ける通有性として女子に教育を深くさせることは女子を生意氣にし、婦徳を缺くものであると云ふ觀念から習字以外の智育に關することは殆んど顧られなかつたものゝ如くである。

四、實踐教育

江戸時代に於ける女子の實踐教育は知育が等閑に付されたのに反して大に見るべきものがあつた。併乍ら教育の理想とするところは大部分室町、鎌倉時代に行はれた理想の繼承であつてこの時代を特色付ける獨特の教育法は行はれなかつたものゝ如くであつて、實踐教育の第一の目的とするところは、婦徳の養成であつた。婦徳とは上代のその如く三従の教を守ることと表面柔和優美に見えるも、其の心底には常に剛毅不屈の精神を養ふことを以て目的として居た、これは上流階級の婦女子に最も強く行はれたところであつて、この時代の女性が一見甚だ退嬰的に見ゆるもその實詳細に觀察する時は後世の龜鑑とするに足る烈婦が多く出て居ることを以て見ても實踐教育が如何に徹底して居たかと云ふことを知り得る。その實例として二三を引用すれば、葛山内記の妻が深く禪に心を寄せ、白鷗禪師に就いて其の教を受け様としたが、禪師は容色の艶麗なるを見て、爲し遂げ難きを思ひ許さなかつたところ、憤然として自らその顔を烙き、容色を毀ちて禪師に就いた如き男子も及ばざる決心の確さを思はせるものがある。又多加貞尼その他萬難を排して復仇を遂

けた女性が、この時代に著しく現はれた如き實踐教育の效果として擧げることが出来る。

五、江戸時代の女子教育家

江戸時代は一般女子教育が不振を見た時代であるが、これは當時の社會思潮の影響に依るものであつて、學者の中には大いに社會に於ける女性觀の誤れることを痛感して、その弊風を打破しやうとした者が多かつた。貝原益軒の如き、山鹿素行の如き、吉田松陰の如き何れも社會の風潮を嘆じて、女子教育革新の實を擧げ様とした人々であるが、これ等に増して女子教育に心を傾け、その功績顯著なるものは藤井懶齋と中村暢齋の二人であつた。

懶齋はその名を臧と云ひ、京都に生れたのであつたが、はじめより醫を以て身を立てんとし岡本文治に學んで久留米侯に仕へた。當時は藤井の姓を稱せず、眞名部姓を稱して居たが後藤井姓を冒すに至り懶齋の號を用ひて勉學に努め、遂に京都に出で山崎闇齋に師事するに至つたが、その後期するところあり、鳴瀧村に閑居して世俗を絶ち、子弟の訓育に關する著述をするを以て終生の業とした人であつて、女子教育には特に力を傾け親しく子女の教育に努むると共に多くの教訓書を著はして裨益するところが多かつた。

中村暢齋は幼少より極めて慧悟、七八歳の頃まで師に就き教を受けたが、その後は全く師を求めず、獨學を以て遂に覇を成した人であつて、益軒、懶齋と共に徳川時代に於ける女子教育界の三幅對と稱せられるところである。益軒の女子教育説に就いては既に述べたところであつて其著和俗童子訓に女子教育説を掲げて居り、懶齋は婦人養草の著があり、暢齋は前二者に對して姫鏡なる三十二卷の著がある。

第十八節 社會教育

一、佛教の社會教化

1、佛教の不振 江戸時代の佛教は一言にして言へば不振に一貫したと云ふことが出来る。併乍ら佛教弘通の範圍は上代に比してはるかに擴大されながら不振に終始したことは一見不可解の如く見ゆるも、從來の如く佛教が思想界の王座に居て文化の深淵をなして居たものが、この時代に至つて遂に佛教に依つて思想界を支配することが出来なくなつたものであつて、これには幾多の原因を擧げることが出来るが、その最も大なる原因とするところは、徳川幕府が切支丹排撃の一政策として佛教を擁護した爲め、自然僧侶が安逸に流れた爲めに、一二の異例的人物を除いては全く名僧の輩出がなかつたことであつて、他は儒教の獨立に依り儒者が極端に排佛思想を鼓舞したことに依るものであつて、林羅山の如きは佛教を以て人倫を破り、實を失つて虚に墮するものなりとて極力これを排撃した。その他にも佐藤直方に依り排釋錄の著が公にせられ排佛を唱導した外儒者の大部分は排佛的思想を包懐して居たので、儒學萬能のこの時代の事として、これ等儒者の思想は一般にも大なる影響を與へ、藩侯の中に於てもこれ等の思想に共鳴する者が著しくなつたことで、その最も極端な者は池田光政である。光政は寛文年間領内に於ける寺院僧侶の大淘汰を行ひ、士民の寺請を神官に移す等の擧に出で、大いに排佛を斷行したのであつて、この外にも保科正之等の如く極端に排佛を行つた藩侯があり、これ等の影響に依つて佛教は舊勢力を失墜するに至つたものである。斯の如き情勢にありながら佛教が一面に於てはその範圍を邊土に擴大したことは幕府の佛教保護政策に依り國民の全部が半ば強

制的に佛教徒となつたことに依るものであつて、佛教はその量に於ては盛大を示し乍らも、その質に於て低下を示したのであつた。

2、僧侶の低下 幕府は切支丹の徹底的取締の爲めに寺請制度を行ふに至つた。寺請とは切支丹禁制のため士民共に僧侶に依つて代々その檀那で決して切支丹信者でないことを證明せしむること、これに依り檀那寺の制度の確立を見、寺院及び僧侶の地位は大いに確定を見るに至つた。

この結果として自然僧侶が安逸を貪るに至り、修業にも又教化の事にも従前の如き努力を拂はない様になつた。これが僧侶の實質を大いに低下せしめた直接の原因であつて、西鶴が當時僧侶の惡質を述べて『今時の出家氣質程可笑しきはなし、智恵才覺には構はず武士の家にては弓馬の藝に疎く、又病者にして勤のなり難きを、勤めて法衣を着せ、町人は算用は愚かに秤目覺えず、日記附さへならざるを、とても商人には思ひも寄らず、世を樂に墨染になれと親類了間の上にて髪をおろさせ云々』と僧侶の模様を述べて居ることに依つて見てもその一端が窺はれる。斯くの如き情態であつたから、到底僧侶に體驗に依る修養に依つて根本的に衆生を教化せんとする如き事は望み得られなかつたのである。

3、天海の社會教化 多くの僧侶が上述の如く安逸を貪り沈滞の氣に浸り切つて居る時に當つて獨り金剛不壞の大勇猛心を起し腐敗した佛教界を革正し衆生を濟度しやうとして起つたのが天海僧正であつた。天海は會津の人で天台宗に通じて居たが獨り僧侶として傑出して居るのみならず、政治にも大いに參與するところあり、幕府に幾多の獻言をして貢獻するところあつたが、天海は佛教界の沈滞を大いに嘆じ、自ら率先して革新に力を傾けたのであつた。即ち上野に寛永寺の創設を幕府に乞ひ、平安城と鬼門封じとして比叡山が營まれた如く江戸城の鬼門に當る上野に寛永寺を營み、以て關東の鎮護として江戸を中心とした一帯の關東

の土地に佛教革新の第一聲を擧げ、後水尾天皇の第二皇子を法嗣として宗教界の沈滞を刷新し、社會教化の實を擧げたのであつた。

4、黄檗宗の傳來 天海僧正の宗教革新に次いで佛教界に大なる衝動を與へたものは、隠元に依り黄檗宗が傳へられたことである。隠元は明の福州福清の人であつたが、黄檗山に入つて蘊奥を究めたのであるが、長崎興福寺の僧逸然の懇請に依つて承應三年渡來した。當時日本の佛教界は全く安眠を貪つて居り、一方に於ては儒教の排佛思想鼓吹に依つて漸く思想界の王座から驅逐され様として居る時に當つてこの新宗派の渡來は大いに佛教界多年の惰眠を醒す刺戟となつた。上述の如き理由に依つて識者の佛教に對する歸信は漸く薄らいで來た時なので、諸國から隠元を尋ねて長崎に集る者が多く、酒井忠勝、板倉重宗等も深くこれを尊信したので、隠元は遂に萬治元年江戸に出で、將軍家綱に拜謁し、家綱から山城國宇治に土地を賜はつて、寛文元年に黄檗山萬福寺を營むに至つたのであつた。これが我國に於ける黄檗宗の行はれたはじめであつて、後水尾天皇の如きも深くこの宗教に歸依せられ給ふたところで、黄檗宗は佛教界多年の積弊を打破して一般の風俗上に於てさへその影響を及ぼした程であつた。

江戸時代に於ける佛教界の社會教育に及ぼした影響は上述の如く極めて微弱であつて、唯僅かに天海の社會教育と隠元に依る黄檗宗の社會教化とを擧げることが出来る。併乍ら黄檗宗の社會教化に及ぼした影響は相當大なるものがあつたが天海に至つては宗教界の刷新には一派の効果を認めることが出来るが、社會教化の點から見ると實に微々たるものであつて、鎌倉時代に於ける日蓮、親鸞、法然等の社會教化とは到底比すべくもなし。

この外に絶對他力を唱導する眞宗に於て幾分社會教化の實が擧げられた事は、從來各宗とも全くその教化

に手を下さなかつた特殊部落の教化が掌られたことであつて、當時この部落民をして人外に置き社會教化と云ふ如き事は全然顧みられなかつた時に當つて眞宗はこれ等の部落にも各々精舎を設け、これ等の階級の精神指導を掌つたことは注目すべきことである。

二、心學教の庶民教化

1、心學教の意義 佛敎界が斯くの如く不振に陥り大衆の精神指導機關として、何等特筆すべき事を爲さなかつたのに反して、庶民階級の敎育機關、又は精神指導の機關として大いに活躍したのは心學教である。心學教には異つた三種の傾向を見ることが出来る。即ち中江藤樹、熊澤蕃山、三輪執齋等の陽明學派が自己の奉ずる陽明學をして普通行はれる陽明學から區別せん爲にこの稱を用ひたものと、又一には朱子學を奉ずる一派の人々が同様の目的に依つて心學教の名を用ひた事と、更に石田梅巖に依つて唱導せられた石門心學教の三種である。前二者に於ても單なる陽明學派朱子學派の奉ずる學と其の趣を異にし社會敎育の點にも相當寄與するところがあつたが、これ等に増して活躍の目覺しかつたのは後者の石門心學である。

2、石門心學教 石門心學は石田梅巖に依て唱導せられた心學教であつて、江戸末期に於ける通俗なる社會敎育の大なる權威であつた。

石門心學は享保十四年石田梅巖翁が京都に於てはじめて起したものであつて、梅巖は名を興長と云ひ、通稱を勘平と云つた、丹波國桑田郡東縣村の生れであつて幼少の頃から其の父の薰陶を受けて居たが年二十三にして京都遊學のことを思ひ立ち、京に上つて商家に奉公する傍ら大いに勉學に努めたのであつた。はじめ神道を研究して居たが後僧了雲に就て佛敎を研究した時に三十五の壯齡であつた。その後約十年間専ら佛敎

の研究に没頭し遂に四十歳を越ゆるに及んで悟道に入ることを得たと傳へられてゐる。次で四十五歳の頃から講釋をはじめたのであるが、梅巖が講釋の理想とするところは、當時の商人階級は社會の下層に沈淪して道德と云ふが如き事は全く等閑に附され、唯目前の營利に向つては手段を撰ばずと云ふ如き状態であつたので、梅巖は先づこれ等の階級を敎化せむものと、享保十四年自宅に講席を開ひて商家の子弟を集め講釋をはじめたのであつた。梅巖が講釋に用ひた書物は非常に廣い範圍に涉つて居り、これ等を深く徹底させると云ふことよりも、商家の子弟として専ら實用を基礎とし廣く道德を養ふことを敎へたものゝ如くである。而して日常説くところの書は、四書、孝經、小學、易經、詩經、大極圖說、近思錄、性理字義、老子、莊子、和論語、徒然草等廣い範圍に涉る書であつた。斯くて延享元年六十歳で歿したのであるが梅巖の説くところは何れも日常卑近の實踐道德であつて、敎育程度の低い人々に於ても容易に實行し得べき説であつた。故に當時敎育程度の低い商人達に強い感化を與へたことは驚くべき程で、社會敎育上及ぼした貢獻は偉大なるものであつた。梅巖の思想を繼承して廣く下層階級の敎化に努力した人には平島塔庵、慈恩尼兼護、中澤道二、柴田鳩翁、脇坂義堂、布施松翁、奥田頼杖等がある。

3、心學教の綱領 心學教の創始者石田梅巖は、儒敎、神道、佛敎等の中から最も人生に卑近にして必要缺くべからざるものゝみを採つて學説を立てたものであつて、心學教は儒、佛、神の敎を一丸としたものと云ふことが出来る。

心學の綱領は性を知ると云ふことであつて、都鄙問答中に、
性を知るは、學問の綱領なり、我怪しきことを語るにあらず、堯舜萬世の法となり給ふも是率性而已、
故に心を知るを學問の初と言ふ。

とて佛教の見性成佛の思想を取入れて禪宗に倣つて公案を授けて問答を試みたり特に靜座を奨励したりしてその教義を説いたのであつた。更に一面に於ては神道をも重んじ、同じく都鄙問答中に、

我朝には、太神官の御末を繼がせ玉ひ、御位に立せ玉ふ、依て天照太神宮を宗廟とあがめ奉り、一天の君の御先祖にてわたらせ玉へば、下萬民に至るまで、参宮と云て、盡く参詣するなり、唐土には此の例なし。と述べて居る。これ等に依つて心學の綱領とするところが神、佛、儒の三方面に涉つて居ることを知ることが出来る。

梅巖は又人の性は至善なるものとの説を立て、性の中には仁、義、禮、智の諸徳が含まれて居るが、凡俗の人間がこれ等の諸徳を發揚することの出来ないのは、其の性が情欲に依つて蔽はれて居て充分に發現することが出来ないで居るからであると説いた、即ち都鄙問答中に、

性を知る時は、五常五倫の道は其の中に備はれり、中庸に、所謂天命之謂性、率性之謂道、性を知らずして、性に從ふことは得らるべきにあらず、(中略)然るを心性の沙汰を除き、外に至極の學問有るを知らず、萬事は皆心よりなす、心は身の主なり。

とて心を知ることが以て修學の第一義とし、これ等の具體的方法として靜座見性と道話との二つに依つて諸生を導いたのであつた。

4、社會教育の方法 心學は教化の對照とするところが既に述べた如く下層階級の子弟であつたので、これ等知識の程度の低い者を教化するには高遠なる理想を説いたところで、到底それは効果を收むることは出来ないで、梅巖は日常生活に極めて卑近なる例を引用して道話を興味深く語り、以て平易な中にも深い人倫を悟らせ様と努力したものであつて、鳩翁道話中に次の如きことが見えて居ることに依つてもその一端を

知り得る。

聖人の道もチンプンカンブンでは、女中や子ども衆の耳に通ぜぬ。心學道話は識者の爲に設けました事ではござりませぬ。たゞ家業におはれて隙のない御百姓や町人衆へ、聖人の道あることをおしらせ申したいと、先師の志で御座りますゆゑ、随分詞をひらたうして、譬をとり、あるひはおとし話をして、理に近いことは神道でも佛道でも何でもかでも、取り込んでおはなし申します、かならず輕口ばなしのやうなと御笑ひ下されな、これは本意ではござらねども、たゞ通じ安い様に申すのでござります。

と述べて居ることに依つて心學の教育法を知ることが出来る。心學の教育を行ふところを舍と云ひ、舍では毎月一定の日を設けて此處に多くの町人を集め、男女の席別を作つて共にその教を聽かしたものであつて、席料その他のものは少しも取らず、何人にも希望の者は入場して講釋を聞く事が出来て居た、故に程度の極めて低い商人や百姓等も自由にこれを聞く事が出来たので、これ等下層階級の教化に大いに寄與するところがあつた。この點心學が江戸時代後期の社會教育に甚大なる効果を與へたのであつて、佛教に於ける下層階級の教化が望まれなかつた當時心學の出現したことは社會教育上大なる收獲と云ふべきである。最後に心學教育の綱領を掲げて筆を擱くことにする。

一、御講釋定日、三日、十三日、二十三日、八ツ時、但し席の儀、其節御案内申候。

一、衣ふく男女共、手習、誦、ぬいものなどに御出の通、ふだんていにて不苦候。御はをりに及不申候。

一、聽衆の席は男女間をへだて、女中の席にはすだれをかけ置申候間、御遠慮なく御出なさるべく候。

一、席料、音物謝禮等、一切うけ不申候。

一、御されあひ御無用、出入しづかになされ、御ちいさきを御いたわり、先づ御つとめあひ隨分神妙にな

され下さるべく候。

一、火の用心御願申候。

又兒童に對する訓話法としては次の如きものを掲げ、七歳乃至十五歳位の兒童に對して言行に關する教育を主に掌つて居たものでそれは次の如き内容である。

- 一、朝をひなり候はゞ、手水を御つかひ候て、まづ神様を御拜みなさるべし。
- 一、次に御佛壇へ御向ひ、御拜みなさるべし。
- 一、三度の御飯をあがる時、寢しなど、御祖父様、御祖母様、とゞ様、かゞ様へ手を御つきなされ候て、おめしあがりあそばされ候へ、御寝なり候へと、御挨拶なさるべし。
- 一、いづかたへも御出のときは、手をおつきなされ候て、とゞ様、かゞ様へ御たづねなさるべく候。
- 一、御二人の親御様の仰せられ候事は、何事にも、あいと御返事なされ候て、きげんよく仰せ付られ候通りになさるべく候。さやうになされ候へば、御成人なされ候て、後々御仕合よろしく候、親ご様の御心に御そむきなされ候かたは、後々不仕合にて、難儀をなされ候。
- 一、何にかぎらず、偽をいふたり、爲たりはなされぬものにて候。
- 一、惣體遊び事にも、あしき事はなされぬものにて候。
- 一、殺生をすることは、甚だあしき事にて候。
- 一、惣じて人のつゝしみて申さぬ不禮なる大口を、かたく申さぬものにて候。
- 一、男女のわかれは大事のものにて候間、幼少のときより、男の子たちと、女の子たちとは一所に御遊びなされぬものと申事、よくよく御聞分けなさるべく候。

尙この外に澤山の簡條を上げて一々克明に教説を加へてあるが「男女童兒に教の趣は先づ幼稚の時より、常の理を心に納得し、未々成人の後たよともなるべき品の色務をおしゆ、嬰兒の身なれば事多くては覺えがたく勉がたかるべし、故に甚切近なる節用を少しく述て、小學に入るの階梯ともなれかしと思ふのみ」とて兒童教育の必要を説いて居る。斯くの時代に適應して下層社會に於ける教化の實を擧げて來た、事に依りその感化の及ぶ範圍も極めて廣く、或は勤勞心の作興となり、或は公共心の養成となり、又は風紀を改善する事に於て、協同心の發露を促す意味に於て社會教育上大なる影響を與へたのであつた。

三、報徳教の農民教育

心學教が主として商業に従事する者と子弟の教育を目標とし、これ等の階級の道德を高めることにあつたのに對して、農民教育を主眼として、心學教と同じく社會教育の目的に依り經濟と道德とを調和し、堅實なる國民思想の涵養を以て立つたものに報徳教がある。報徳教は二宮尊徳に依つて創められたのであつて、其の主眼とするところは農村の社會教育を行ふことであつた。尊徳夜話に次の如き一節があることに依り報徳教の大綱を知ることが出来る。

今道々の專とする處を云はゞ、神道は開國の道なり、儒學は治國の道なり、佛教は治心の道なり、故に餘は高尚を尊ばず、卑近を厭はず、此の三道の正味のみを取れり、正味とは人界に切用なるを云ふ。切用なるを取つて、切用ならぬを捨て、人界無上の教を立つ、是を報徳教といふ。戯に名づけて神儒佛正味一粒丸といふ。其の効能の廣大なること擧げて數ふべからず。

と述べて居ることに依つて見ると報徳教なるものは梅巖の心學教と綱領を著しく同じうして居るところで、

その綱要を次の如き五項目に分ち、専ら實踐を旨として居るところにこの特色があり、社會教育上に大なる貢獻を残した所以も亦これに外ならない。

1、誠心をもつて本と爲すべきこと。

2、勤勞を以て主となすべきこと。

3、分度を立つるを以て體となすべきこと。

4、推讓を以て要と爲すべきこと。

5、獨立自營を以て精神となすべきこと。

等であつて、これに關し次の如く詳細に説いて居る。

至誠は報徳教第一の綱領であるが、これに就いて、

誠は則ち明かなり、明かなれば則ち誠なり。

又は、

至誠息むなし、之を索を綱ふに譬ふれば、一房を綱て以て錢に易ふれば則ち四錢を得、四錢を投ずれば則ち一房を得、之を誠なれば明にして、明かなれば誠なりと云ふ。

索を出て錢に易へ、錢を以て索に易へ、萬世息むなし、之を至誠息むなしと謂ふ。

又之を珠玉に譬ふれば上下四方より之を見て瑕無き者は至誠なり、一方より之を見て瑕なきものは、至誠に非らざるなり。

更に勤勞を以て主となすことに就ては、人間が凡そこの世に生くる爲には勤勞と云ふことが絶対に必要であつて、人がその徳を完成するものこの勤勞に依るものであると説いて居り、

更に分度に就ては、

天地既に命分あり、人倫亦命分あり、是固より天理必至の符、一定易ふべからざるものなり。

夫れ其の命に循て其の分を守るは、人道の本なり。

分を守るに道あり、度を立つる是なり、度を立つるに道あり、節制是れなり、凡そ國用を制するに、一歳

の入を四分して其の三を用ひ、其の一を餘して以て儲蓄を爲す、其の三を用ふるに道あり、均分して十二

と爲して一月の用度を得、又分けて三十と爲し、一日の用度を得、其の節制するところ、天祿度數、決して易ふべからざるは、亦天地自然の命分なり、夫れ天地の草木を生ずるや、春之を生じ、夏之を長じ、秋

之を收め、冬之を藏す。蓋し春生じ秋收むるは三時を用ふるなり、冬藏するは一時を蓄るなり。天地何ぞ

三時を用ひ、一時を蓄ふるや、蓄へざれば則ち復生する能はざるなり。

然れば則ち三を用ひ一を蓄るは天地の道なり、聖人之に法り、四分の制度を設け、其の三を用ひ、其の

一を蓄ふ、故に三年にして一年の儲蓄を生じ、九年にして三年の儲蓄を生じ、三十年の通を以て九年の儲

蓄有り、國九年の儲蓄ありて後凶旱水溢有りと雖も、民采色なからん。

とて經濟に立脚した分度を説き、人も各々その財産の如何に依つて生計を立つるべきであるとして社會上の地

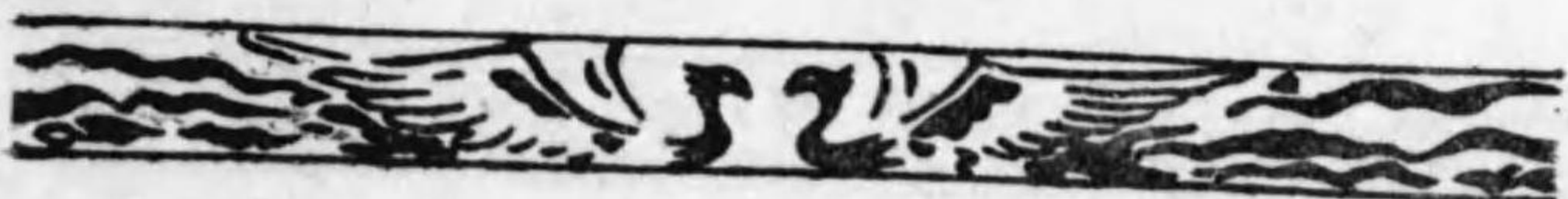
位を自覺し、節制に依つて人たるの道を立てねばならない。と云ふのが尊徳の節度を守る事に對する考へ方

であつた。

推讓とは分度を守り、勤勞に依つて得たるものを、他に讓ることであつて、人の人たる所以もこの推讓の

徳を具へて居るからである。

とて、



讓は人道の粹なり、身、家、國、天下、讓道を失つて衰へざるものは未だこれあらざるなりと述べ推讓の必要を説いて居る。

(終)

昭和十九年三月卅一日印刷
昭和十九年四月十五日發行

興皇民魂修鍊史
非賣品

不許
複製

編發行人 東京都豊島區要町二丁目三番地 丸山朝吉
發行所 東京都豊島區要町二丁目三番地 日本教育振興會
會員番二二二四一號
印刷者 東京都小石川區春日町二ノ二九 水谷英一
會員番一四三二號

發兌

出イ一八〇一八七號
數一〇〇〇部

日本教育振興會

東京都豊島區要町二丁目三番地
振替東京一八七三五三番

445
174

終

